

戦後大衆文化史と緒形拳 —俳優アーカイブの可能性—

馬場弘臣

東海大学教育開発研究センター教授

〔講演録〕

はじめに

皆さん、こんにちは。東海大学の馬場と申します。私の専門は歴史学で、江戸時代史を研究しています。江戸時代史を研究している私が、この度は緒形さんの展覧会をやらせていただきました。これについては、また最後にお話ししようかと思っています。

今日は皆さんにお配りしたレジュメをもとにお話ししていきたいと思います。もっとも、今日のお話は、展覧会の記念冊子として刊行しました『戦後大衆文化史の軌跡—緒形拳とその時代』（東海大学×横浜市歴史博物館編）の中に書いた文章（82頁～115頁）にプラスアルファした話になります。早速、緒形拳さんの略歴について紹介したいと思います。

本名は緒形明伸。1937（昭和12）年7月20日生まれで、1958（昭和33）年に新国劇の舞台でデビューし、2008（平成20）年10月5日に71歳でお亡くなりになっていますので、ちょうど俳優人生が50年になります。出身地は東京府牛込区、現在の東京都新宿区です。高校時代より劇団新国劇の演目で北條秀司作、辰巳柳太郎主演の「王将」に憧れ、1958年4月に北條先生の紹介で新国劇に入団して、辰巳さんに師事します。1960（昭和35）年「遠い一つの道」で島田正吾に抜擢され、新国劇および映画、テレビに主演デビュー。1965（昭和40）年に主演の豊臣秀吉を演じたNHK大河ドラマ「太閤記」で人気を博しました。1968（昭和43）年に新国劇を退団した後、多くの映画にも出演し、1978（昭和53）年には「鬼畜」で初の日本アカデミー賞最優秀主

演男優賞を受賞。その後も2008年に亡くなるまで、映画・テレビ・舞台で、時代劇、現代劇を問わず幅広く活躍しています。

簡単に紹介をさせていただきました。展覧会を開催するにあたりまして、映画、テレビドラマ、演劇と、いろいろ分野で緒形さんについて調べてみました。それぞれの分野の専門書などをみていきますと、意外と緒形さんについて書かれている部分が少ないんです。例えば映画ですと、三船敏郎さんとか石原裕次郎さんなどの記述のほうが厚くて、緒形さんについては意外と取り扱いが小さい。それはテレビについてもいえることで、舞台についてはそもそも戦後の大衆演劇について書かれたものが少ないのじゃないかと思います。

そこでこれはちょっと逆転の発想が必要じゃないかと思いました。どういうことかと言いますと、逆に緒形拳という一人物を通して、映画や舞台、テレビといったさまざまなエンターテインメントを通覧したらどうなるかという、それが今回の展覧会のコンセプトになっています。

このスライドは、展示説明会の時に結論として挙げたものですが、緒形拳という人は「新国劇の舞台で育ち、テレビで飛躍し、映画で花開いた。文字を書き、絵を描き、ものを創り、旅で世界をみて感性を研ぎ澄ませていった」と、そういう人生だったんじゃないかと思うのです。ただ、今日はこれを全体的に展開するのはかなり難しいかと思いますので、私なりに絞って、緒形さんの俳優人生について紹介してみたいと思っています。

特に今回はせつかくの講演会ですので、新たに作成した図や表などを使いまして、お話をしていこうかと思っています。

まず表1は、緒形さんの受賞歴を一覧にしたものです。一番初めが1961（昭和36）年で、北條秀司作の新国劇の「丹那隧道」という舞台で、第15回文化庁芸術祭

本稿は、本研究所の個別プロジェクト「戦後大衆文化の基礎的研究—緒形拳氏関係資料の整理をめぐって—」の研究成果にもとづき、2020年10月2日から12月6日まで開催された横浜市歴史博物館企画展「俳優緒形拳とその時代—戦後大衆文化史の軌跡」記念講演会（12月5日）の講演録である。

表 1 緒形拳受賞歴

年	年齢	受賞・受賞歴	作品	その他
1961年(昭和36年)	22	第15回文化庁芸術祭演劇部門奨励賞	新国劇「丹那隧道」(舞台)	
1966年(昭和41年)	29	第3回ゴールデン・アロー賞新人賞 第4回テレビ記者会賞個人賞	NHK「大河ドラマ 太閤記」(テレビ)	
1973年(昭和48年)	36	第10回ギャラクシー賞	朝日放送・松竹「必殺仕掛人」(テレビ)	
1979年(昭和54年)	42	第2回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞	「鬼畜」(映画)	
		第21回ブルーリボン賞主演男優賞		
		第33回毎日映画コンクール主演男優賞		
		第3回報知映画賞主演男優賞		
		第52回キネマ旬報ベスト・テン主演男優賞 第3回シネ・フロント賞男優賞		
1980年(昭和55年)	43	第1回ココマ映画祭主演男優賞 第3回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞	「復讐するは我にあり」(映画)	第3回日本アカデミー賞最優秀作品賞
1982年(昭和57年)	44	第5回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞	「北斎漫画」(映画)	
1984年(昭和59年)	47	第7回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞 第21回ゴールデン・アロー賞大賞・映画賞	「楳山節考」・「陽暉楼」・「魚影の群れ」(映画)	「楳山節考」 第7回日本アカデミー賞最優秀作品賞
		第38回毎日映画コンクール主演男優賞	「楳山節考」・「OKINAWAN BOYS オキナワの少年」・「陽暉楼」・「魚影の群れ」(映画)	第36回カンヌ国際映画祭パルム・ドール
		第26回ブルーリボン賞主演男優賞		
1986年(昭和61年)	49	第9回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞	「権」・「薄化粧」(映画)	
1987年(昭和62年)	50	第10回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞	「火宅の人」(映画)	第10回日本アカデミー賞最優秀作品賞
1988年(昭和63年)	51	第11回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞	「女術 ZEGEN」(映画)	
1989年(平成元年)	52	第12回日本アカデミー賞最優秀助演男優賞	「ラブ・ストーリーを君に」・「優駿 ORACION」・「華の乱」(映画)	
1990年(平成2年)	53	第13回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞	「社舞」・「将軍家光の乱心 激突」(映画)	
		第11回松尾芸能賞優秀賞		
1992年(平成4年)	55	第15回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞	「大誘拐 RAINBOW KIDS」・「咬みつきたい」(映画)	
		第15回日本アカデミー賞最優秀助演男優賞	「グッバイ・ママ」(映画)	
1993年(平成5年)	56	第16回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞	「おろしや国酔夢譚」・「継承盃」(映画)	
1996年(平成8年)	59	第21回ゴールデンチェストドラマ番組国際テレビ祭(ブルガリア) 最優秀男優賞	NHK「百年の男」(テレビ)	
1999年(平成11年)	62		「あつもの 歪平の秋」(映画)	1999年度フランス・ベノデ国際映画祭グランプリ受賞
2000年(平成12年)	63	紫綬褒章		
2007年(平成19年)	70	第16回日本映画批評家大賞審査員特別主演男優賞	「長い散歩」(映画)	第30回モントリオール世界映画祭グランプリ受賞
2008年(平成20年)	71	旭日小綬章		
2009年(平成21年)		第32回日本アカデミー賞会長特別賞		
		第51回ブルーリボン賞特別賞		
		第63回毎日映画コンクール特別賞		
		第60回NHK放送文化賞		
		第35回放送文化基金賞	フジテレビ「風のガーデン」・NHK「帽子」(テレビ)	
		2009年エランドール賞特別賞 東京ドラマアウォード2009特別賞	フジテレビ「風のガーデン」(テレビ)	

演劇部門奨励賞されています。テレビでは1966(昭和41)年に前年の大河ドラマ「太閤記」の豊臣秀吉役でゴールデン・アロー賞とテレビ記者会賞個人賞を受賞されています。また、緒形さんといえば当然「鬼畜」とか「復讐するは我にあり」、それから「楳山節考」などの映画作品が有名なのですが、一覧表にもありますように、アカデミー賞やゴールデン・アロー賞、ブルーリボン賞など数々の有名な賞を受賞されています。

このように、1960年代から2000年代までさまざまな賞を受賞されているのだということが分かっていただけかと思えます。特に1980年代などは、映画賞を総なめといった感があります。その源泉は一体何なんだろうかというのが、今日のお話の基本になります。そこで今日は、特に次の3つのことについてお話をしようと思っています。1つ目が大衆とは何かということ、2つ目が緒形拳の仕事について、そして3つ目が演劇アーカイブスの可能性についてのお話しです。

I. 大衆とは何か

私たちは普通に「大衆」という言葉を使いますが

も、そもそも「大衆」とはいったい何を示すのでしょうか。私は江戸時代を研究していますが、江戸時代では「民衆」という言葉を使っても「大衆」という言葉は基本的に使いません。「大衆」という言葉は、「群衆」「公衆」と並んで、社会学の研究対象となっています。社会学では、それぞれの要素として、物理的な距離、コミュニケーションとメディア、民主化と読み書きリテラシー、それから産業構造などが尺度となります。

まず「群衆」ですが、これは第一にパーソナルコミュニケーションの範囲、つまり物理的に近い人たち、近接性が重要なのですが、だからといって組織性があるものではなく、一時的なものだという定義がなされています。会話したり演説したり、あるいは伝言などの近い人たちの集まりのことを群衆というのですね。

これに対して、公衆になりますともうちょっと範囲が広がります。ミニコミュニケーションとかミニメディアなどというのですが、具体的には、例えば手動の印刷機に印刷されたものが配布される範囲あるいは新聞や雑誌などが作成され、流布される範囲を示すといわれています。「公衆衛生」という言葉がありますが、「公衆」は「群

集」より精神的・社会的に進化した段階、組織化された段階をいいます。

これに対して「大衆」は、コミュニケーションの範囲がさらに広がって、いわゆるマスコミュニケーションが中心となり、それを伝える手段としてマスメディアが発達していきます。それまでは言葉とか手紙とか、あるいは印刷物が伝達手段だったものが、この段階では映像や音声、通信が使われるようになってきます。日本の場合、だいたい1900年代ぐらいに映画が始まります。ラジオの放送開始が1920年代で、日本放送協会が成立するのもこの頃です。それからテレビは1960年代ぐらいに急速に浸透していきます。そして1990年代の後半にはインターネットが普及します。これらのメディアの発達に応じて社会の民主化が進むとともに、普通教育による読み書きのリテラシーが上昇し、普通選挙制が始まって、平等の思想、つまりデモクラシーが始まるという流れになります。さらに産業的には、産業革命が起きて資本主義への転換が起き、大量生産、大量消費が拡大する一方で、都市化が進みます。資本主義化、都市化の進展は、賃労働者層の拡大を促し、それらがさまざまなメディアを受容する受け皿となっていくのです。

こうしてみると、「大衆」というのは近代化の所産であったといえるようです。ただ、江戸時代の研究者からすると、こうしたカテゴリーには入りませんが、江戸時代には結構、読み書き算盤のリテラシーが進んでいます。さらに印刷物として浮世絵、瓦版、道中記などが発達しますので、それなりに情報の手段が拡大していますから、その前段として「民衆」の時代を設けてもよいのではないかと考えています。すなわち群衆—民衆—公衆—大衆と区分していくわけです。ただし、歴史的に「民衆」をどの時代の範囲に措定するかという問題がありますし、そうした発展段階的な考え方が可能かという問題もあります。したがってこれはあくまでも私自身の見解です。

いずれにしても、こうした指標で考えますと、日本の場合「大衆化」は、大正デモクラシーを中心とした大正期、1911年～26年ぐらいが一つのターニングポイントになるようです。歴史小説とか時代物と呼ばれるような娯楽性を中心とした通俗的な小説として、大衆文

学が登場するのがこの頃で、その後、現代物の通俗恋愛小説や推理小説なども含むなど、その概念が広がってきます。さらには新国劇や新派などの大衆演劇が活況を呈するのもこの頃のことです。

まさしく「大衆」というのは明治以降、近代になって人々の教育水準が上がり、民主的なものが浸透していった、産業構造として賃労働者が増えてくる。さらに大量消費、大量生産が拡大して、初めて「大衆」と呼ばれる人たちが誕生してくる。その「大衆」に向けてさまざまな娯楽が生まれてくる。マスメディアが発達する。それはやっぱり大正という時代が大きな転機だったのだろうということです。さらにいえば、緒形さんが活躍を始める1960年代、昭和30年代の後半は、映画・ラジオ・演劇からテレビの発展期といったメディアや文化の転換期として大きな意味を持っていたのだと思います。これが本展覧会で、大衆文化、あるいは大衆文化史を取り上げてきた所以です。

II. 緒形拳の仕事

それでは次に、第2のテーマとして緒形拳さんの仕事について具体的にお話をしていきたいと思います。今回の展覧会では、緒形さんの全俳優人生をまず、5つのカテゴリーに分けて展示しました。①新国劇と緒形拳、②テレビから映画へ、③多様化する大衆文化の中で、④時代の転換期に、⑤舞台への回帰の5つのコーナーです。今回の講演会ではこれをより緒形さんの俳優人生に合わせた形で、①新国劇修業時代—1958年～68年—20歳代、②テレビ他流試合時代—1968年～79年—30歳代、③映画全盛期—1980年～89年—40歳代、④円熟期・転換期—1990年～99年—50歳代、⑤舞台への回帰—2000年～07年—60歳代の5つのカテゴリーに分けてお話ししたいと思います。なお、表4として、緒形さんの略年表と主な出演作品、芸能界とメディアの動向、それらの時代背景を示した一覧表を掲載しておりますので、ご参照ください。

出演回数の変遷 まずは表2をご覧ください。これは企画展覧会場の外に掲示しています10メートルの長大な年表を数量的にまとめたもので、舞台・映画・テレビドラマに、ドキュメンタリーとその他テレビ番組への

表 2

	①新国劇修行時代(1958～68)		②テレビ他流試合時代(1968～79)		③映画全盛時代(1980～89)		④円熟・転換期(1990～99)		⑤舞台への回帰(2000～)		合計	
	本数	主演	本数	主演	本数	主演	本数	主演	本数	主演	本数	主演
舞台	209	32	35	12	11	2	4	4	13	12	272	62
映画	4	1	14	4	25	13	13	8	14	3	70	29
テレビドラマ	30	11	72	26	44	28	43	27	22	6	211	98
ドキュメンタリー			1		4		14		15		34	
その他テレビ番組	16		20		30		25		29		120	
合計	259	44	142	42	114	43	99	39	93	21	707	189

出演を加えて統計化したものです。まず①新国劇に所属していた1958年～68年までの10年間で出演した舞台の本数が209本で、このうち主演が32本になります。さすがに舞台出演の数としては群を抜いて多いですね。ほぼ毎月舞台に立ち続けていますから、映画は、新国劇の舞台で初めて主演を務めた「遠い一つの道」(1960年、東宝)をはじめ、4本に出演されています。テレビドラマへの出演も意外に多くて、同じく主演を務めた「遠い一つの道」(フジテレビシオノギ劇場、1961年1月～2月)をはじめとして、30本出演されています。主演を務めた作品も11本あって、この中でも1965(昭和40)年の第3回NHK大河ドラマ「太閤記」が、全国的な人気を獲得した出世作であったことは、改めていうまでもないでしょう。この時期の他のテレビ出演も「太閤記」絡みが多いですね。

興味深いのは②テレビ修業時代で、テレビドラマへの出演数が他の時代と比べても72本と圧倒的に多いのです。「テレビ修業時代」というネーミングは、他ならぬ緒形さん自身が語っていた言葉です。緒形さんは1968年(昭和43年)に新国劇を退団されます。そしてその言葉通り、その後の10年間はとにかくたくさんテレビに出演されています。おもしろいことに、少しの差ですが、テレビドラマの主演は③の映画全盛期の方が多いたのですが、出演作品数であればこの時期が圧倒的です。まさにテレビ修業時代といった表現がぴったりです。表4にもありますように、1969年になると日本のテレビ受信機の生産台数が世界一になります。また、70年代に入るとテレビのカラー化が進んで、テレビ文化が急激に発達していきます。緒形さんがそこに目をつけられたのは一つの先見の明であったと言っても過言で

はないかと思います。

③映画全盛期になりますと、当然のことながら映画出演が増えて25本、うち主演が13本です。10年間で主演が13本ということは、1年に1本以上主役を演じているということになります。そもそも映画も2本以上に出演されていることになるのですね。これは表1の受賞歴をみても明らかなのですが、アカデミー賞最優秀主演男優賞を2回獲得しているだけでなく、毎年のように優秀主演男優賞を獲得していらっしゃいますから、まさに映画出演全盛期です。しかもテレビドラマにも44本出演されていて、これは②に比べれば数はかなり減りますけれども、主演の数がもっとも多いのもこの時期です。緒形さん40歳代で、もっとも脂ののりきった時期です。ただご本人は「映画俳優として、四十才のルーキーはいつも八方ふさがりの自閉症気味の緊張感がついてまわる」と、その時の心情を吐露しています(『戦後大衆文化史の軌跡』50頁)。確かに遅咲きの大輪でした。

④は50歳代で、円熟期・転換期と位置づけていますが、これは世の流れではありますが、映画の出演数が13本、主演が8本と減ってきます。ただ、テレビドラマは出演数も主演の数も43本・27本と、③期とは1本しか違っていません。もっとも大きな違いは舞台の数の減少と言えるかも知れません。

ただ、ここから特筆すべきは、ドキュメンタリーが14本と、出演回数が増えることかと思えます。緒形さんは、芝居はフィクションの世界であるのに対して、ドキュメンタリーはノンフィクションの世界だから、その両方を行ったり来たりすることでバランスをとるといったことをおっしゃっていましたが、50歳代に入ってその傾向が強くなっていったということでしょう。

最後に⑤舞台への回帰です。60代から70代にかけてさすがにテレビドラマ出演数・主演数は22本・6本と減っていきますが、映画は出演数14本と④期とほとんど変わらないものの、さすがに主演の数が3本と減少しています。ただ、実働8年と時間的には短いので、そうした点も考慮する必要があるかと思います。やはりこの時期は、ドキュメンタリーへの出演がもっとも多いこと、舞台への出演・主演回数が増えていることが特徴でしょう。これらについてはまた、後で触れたいと思います。

時代背景 次に緒形さんが活躍された時代の時代背景についてまとめてみましょう。まず緒形さんが新国劇に入って退団するまでの10年、これは改めていうまでもありませんが、戦後の高度経済成長期にあたります。世代でいえば団塊の世代ですね。ただし、緒形さんが入団された頃というのは、1955年から始まった高度経済成長が踊り場に差し掛かっていた頃で、入団後の1966年から第2次高度経済成長の時代に入っていきます。

緒形さんが新国劇を辞めた後、特に1970年代というのは戦後の社会秩序・世界秩序が大きく変化した時代でした。1960年代の終わりには日本の各地で大学紛争、学園紛争の波が広がっています。そして1973（昭和48）年のオイルショックによって戦後の高度経済成長が終わりを告げます。いけいけどんであった1950年代後半から60年代に対して、無感動、無関心、無気力といった三無主義とか、社会に出ることを拒否するモラトリアム世代とかいわれる時代、あるいは虚無の時代などといわれる時代に入ってきます。私はちょうどこの頃に高校時代を過ごしていますので、実感としてよくわかります。

それが1980年代になりますと、85年を境にしてバブル経済の時代に入っていきます。これはアメリカはニューヨークのプラザ・ホテルに先進5か国の蔵相らが集まり、アメリカのドル高に対する是正のために合意された一連の事項、いわゆるプラザ合意をきっかけとしたもので、日本では急速な円高が進み、国鉄民営化などの内需拡大策とあいまってバブル経済と呼ばれた経済活況が出現したのです。その頃の若者たちは新人類といった言われ方をするようになってきます。三無主義の

対極ですね。ところが、空前のバブル経済も1991年に崩壊します。そこから段階的にデフレスパイラルに陥っていくわけですが、90年代の特に後半の若者たちは、就職が困難な就職氷河期の世代と呼ばれたり、世紀末も重なってロストジェネレーションの世代などと呼ばたりするようになっていきます。

2000年代になってもこうした傾向は変わらないのですが、2002年に導入された、いわゆるゆとり教育の影響で、この世代はゆとり世代などと呼ばれるようになります。ちょうどちの娘たちがゆとり世代のど真ん中にいるわけなんですけれども、その頃の若者世代の特徴が時代の特徴として語られているわけです。

大衆文化とメディア そしてこの講演のもう一つの柱である大衆文化ということでいいますと、メディアというものがどのように時代に作用してきたかということが非常に重要だと思います。その中心はテレビそしてインターネットです。緒形さんの新国劇時代はテレビの黎明期で、逆に日本映画や大衆演劇は次第に斜陽化が進んでいく時代です。表4の略年表では、青文字でいくつかの映画作品と監督名をあげています。黒澤明さんですとか、木下恵介さん、今井正さんなどです。これらの監督作品は戦後の映画全盛期だった時代のものです。そこからだんだん映画産業が斜陽化してくる。同時に新国劇のような大衆演劇も斜陽化していきます。

1970年代になりますと、テレビがさらに発達していきます。これはちょうど緒形さんのテレビ修業時代と重なります。ここでうまく合致するのです。先ほどいいましたように、日本映画は斜陽化、別の言い方をすると多様化の時代に入っていく、大衆演劇も斜陽化します。それに反するように、つかこうへいさんなどの小劇場がもてはやされる時代になっていきます。つかさんらは、小劇場第2世代にあたるのですが、これも表4の略年表でご確認いただければと思います。

そして1980年代は、これはもうテレビの全盛期、テレビドラマの全盛期になります。フジテレビが「楽しくなければテレビじゃない」と喧伝していたのがこの時期です。漫オブームがあったり、「笑っていいとも！」が始まったりといった印象があります。トレンドドラマも80年代の後半でしたか。また、この時代の映画とい

えば、洋画ばかりだった印象があります。特にアメリカのハリウッドものですね。例えばバック・トゥ・ザ・フューチャーシリーズの第1作が公開されたのが1985年でした。この時期に映画界はもちろん、テレビドラマでももっとも活躍したのが緒形さんだったのです。

またテレビの話に戻ります。1990年代に入ってくるとBS放送やケーブルテレビなど、テレビの多チャンネル化が進みます。機能的にもチャンネルがダイヤル式からボタン式、そしてリモコンに変わっていきます。そうしますと、番組を今まで家族一緒に見ていたのが個別の部屋になったり、おもしろくなければチャンネルをすぐ切り替えていくという時代になります。

90年代のメディアでもっとも大きな変化はインターネットの本格的普及です。Windows95が発売されたのが1995年で、Windows3.1に比べて簡単にインターネットにつながることができるようになってきました。2000年代になるとテレビのデジタル化とIT革命、つまりインターネットを中軸とした情報革命が進みます。緒形さんは2002年に個人事務所を立ち上げられた後、「ハラハチブンメー」というホームページを立ち上げていらっしゃいます。当時、個人的にホームページをもっていた俳優さんはほとんどいらっしゃらなかったと思います。そう考えてみますとこれらの全過程に、戦後の重要な転換期のすべてを俳優として緒形さんは体験されているのです。そのことの意義を問い直してみようというのが、この展示会の最大のテーマでした。

新国劇と3人の恩師 このようにみていきますと、やはり新国劇の修業時代のことについて少し詳しくお話しした方がよいのかなと思います。たぶん皆さん、いや私もそうですけれども、新国劇時代については、知らないことが多いんじゃないかと思います。

先にも述べましたように、新国劇修業時代には10年の間に209本の舞台に出演していて、そのうち主役が32本です。映画にも4本出ていらっしゃって、意外なことにテレビドラマにも30本、主演も11本あります。

新国劇は、1917（大正6）年4月に、芸術座を脱退した澤田正二郎を中心として倉橋仙太郎、金井謹之助、渡瀬淳子らによって結成された劇団です。澤田は、歌舞伎と新劇の間をゆく新しい国民演劇の樹立を目指し、

「右に芸術、左に大衆」、あるいは「民衆と握手せよ、而して片足のみは不断に民衆より半歩を進めよ」という「演劇半歩前進主義」を主張しました。ここでは実は「大衆」という言葉と「民衆」という言葉の両方出てくるのです。図1（7ページ参照）は、当時の演劇界、近代の演劇の相関図を示したものです。実はこの図1は、北條秀司が脚本を提供した演劇をもとに描いたものです。それが明治以降、近現代の演劇の展開を示すことになるのです。いずれにしても旧来からの演劇、これは江戸時代からということになるのですが、演劇を代表するのは歌舞伎です。歌舞伎に対して、明治以降になってくると演劇改良運動が起こって、西洋の影響を受けた演劇として新劇が登場してきます。これに対して歌舞伎は旧劇と呼ばれるようになります。

旧劇の歌舞伎に対して、川上音二郎や角藤定憲、伊井蓉峰らによって始まった写実的な現代劇による新たな大衆演劇が、明治30年代（1897）頃から「新派劇」略して「新派」と呼ばれるようになります。現在は二代目水谷八重子さんや波乃久里子さんらが継承されています。

新国劇は、歌舞伎＝旧劇を別に「国劇」というものに対して、新たな国劇を創始するという意味で名づけられたものです。だから歌舞伎ほど古くなくて、だけど民衆よりも一歩以上先に進み過ぎてはいけないんだ。あくまでも民衆と握手し、大衆とともにある芸術をめざすと、だからそもそもが新たな「大衆演劇」であることをめざした劇団なのです。「演劇半歩前進主義」というのはその究極の目的でした。緒形さんもその意義を最後まで強調されていましたね。ですから新国劇では、「国定忠治」「月形半平太」などの当たり芝居で、様式化された歌舞伎の立ち廻り＝殺陣に対して、写実的で緊張感のある立ち廻り＝殺陣で演じる「剣劇」を創案します。そもそも殺陣という文字を「たて」と読むのも当て字だそうです。また、「チャンバラ」という語の流行も新国劇によるといわれています。そうした経緯から特に男性が好む劇団として人気がありました。ですから新国劇でも歌舞伎と同じように「大向う」という掛け声が掛かるのですね。「澤田」とか「緒形」とか、そういった野太い掛け声が掛かります。

ただし、1929（昭和4）年3月に澤田が36歳の若

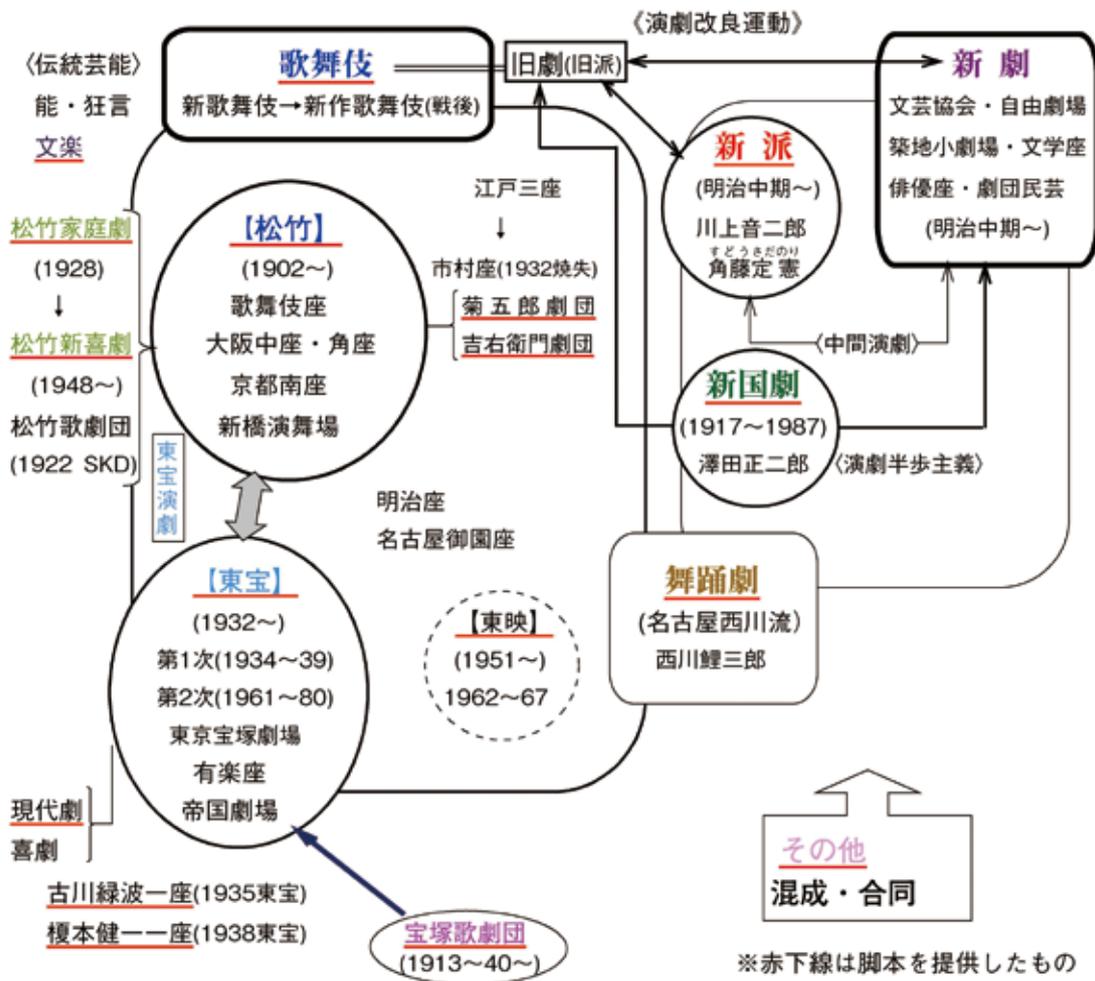


図1

さで急逝すると劇団は危機に陥るのですが、性格から芸風まで対照的な辰巳柳太郎と島田正吾の抜擢が功を奏して人気を呼び、引き続き演劇界に確固たる地位を占めたのでした。戦後は北條秀司作「王将」「霧の音」などの名作を得て人気を保ってきましたが、1960年代後半頃から大幹部の辰巳や島田の高齢化、若手の脱退などで衰退にむかい、1987（昭和62）年8月、新橋演舞場での劇団創立70周年記念公演を最後に解散したのでした。

緒形さんは最後まで新国劇ということにこだわっていらっしゃいました。とくに劇作家の北條秀司と、新国劇の両巨頭であった島田正吾と辰巳柳太郎の3人を師匠として最後まで敬愛されていました。そこで次にこの3人の師匠について紹介していきましょう。

北條秀司の本名は飯野秀二で、1902（明治35）年11月7日に大阪で生まれます。1928（昭和3）年に日本電力株式会社大阪本社から箱根登山鉄道に出向すると、この設立に従事するかたわら、劇作家をめざして岡

本綺堂に師事し、綺堂が亡くなった後は長谷川伸に師事しました。1937（昭和12）年に「表彰式前後」で劇作家としてデビューします。1947（昭和22）年に新国劇で初演された「王将」は最大のヒット作となり、第2部・第3部を含めて現在まで50回以上再演を重ねています。その後も歌舞伎、新派、新国劇、舞踊劇、東宝演劇などさまざまな分野に数多くの作品を提供していき、創作した戯曲の数は220編余りを数えます。大衆演劇の第一人者として、庶民の哀歓や社会と人間とのかかわりを、その強靱かつ繊細な精神で叙情豊かに描き続けたといわれています。また、自ら書いた脚本を自ら演出するという自作自演の姿勢を貫き、その厳しい指導から「北條天皇」「強情秀司」などとも称されていました。1996年5月19日に93歳で永眠されています。

次に新国劇の両巨頭のひとりであった島田正吾さんについてです。島田さんは本名を服部喜久太郎といい、1905（明治38）年12月13日に神奈川県横浜市に生

まれます。1923（大正12）年に新国劇に入団すると、知性派、努力型の俳優として頭角を現し、役の把握と表現に際しては、徹底的な追求を惜しまないとされる一方、常に石橋を叩いて渡るような堅実な芸風が持ち味でした。緒形さんは島田さんのことを新国劇の技、演劇の技を習ったというふうに表現されています。また、北條先生は「万年雪のごとき役者」と評しています。晩年のひとり芝居は有名で、2004（平成16）年11月26日に98歳で亡くなりました。

両巨頭のもうひとり、辰巳柳太郎さんは、1905年4月20日に兵庫県赤穂市に生まれます。本名は新倉武一で、島田さんとは同い年ですが、生まれは辰巳さんの方が早いです。ただし、辰巳さんの新国劇入団は1927（昭和2）年ですから、島田さんのほうが先輩になります。辰巳さんは、天衣無縫で野性的な芸風を持つといわれていまして、北條先生は「客気と臭気に満ちた無頼漢的俳優である。作家と見れば嘔みついて、これを征服しようとする。負けず嫌いな私にとって、正に得難き好敵手だった」と評しました。緒形さんは、辰巳さんから役者の心を学んだと述べています。1989（平成元）年7月29日に84歳で永眠されています。

先にも紹介しましたように、緒形さんが新国劇に入団できたのは、北條先生の口利きがあったからでした。これにはちょっとした裏話があります。緒形さんのお兄さんで緒形信司さんという方がいらっしゃいまして、この方が北條先生の娘さんである美智留さんと、俳優養成所の2期生で一緒だったのです。残念ながら信司さんは20歳になる前にお亡くなりになりました。ただし、その縁で美智留さんが北條先生にお願いして、それを受けて先生が新国劇入団に口をきいたというのが実際の経緯なのでした。

緒形さんの話では、それまでは自分で何度か楽屋に辰巳さんを訪ねては弟子入りをお願いしたそうなのですが、「うん、まあ、はあ」と言っているだけで全然駄目だったのが、北條先生が一筆書いたら「うん。あしたから来なさい」と演劇部長にいわれたとおっしゃっていました。それほどの力を持っていたということなのですね。

1958（昭和33）年4月、こうして緒形さんは無事に新国劇に入団したわけですが、入ってすぐのひと月ぐ

らいは、新国劇が地方公演に行ったものですからぜんぜん仕事がなかったそうです。そこでまた美智留さんに頼み込んだところ、北條先生がいわゆる書生みたいな立場で雇ってくれたそうです。そうやって北條邸に転がり込んだはいいが、何をやってたかというのと北條先生の鉛筆削りなどをやっていたそうなのです。

北條先生のお宅についてなのですが、私どもは大学院生や学生とともに、2000（平成12）年から小田原市立図書館から委託を受けまして、北條邸の蔵書と資料調査をしていました。そうしたら蔵書だけでも約2万点ほどもあるのです。それらに本の中で、北條先生は緒形さんに、真山青果や行友李風などの劇作家の本を読んでおけ、読み終わったら内容をまとめて提出しろと命じたそうです。このひと月間、時間のあるときはずっとそれを実行していたそうで、のちに緒形さんは、自分にとってはあれがすごい勉強になったとおっしゃっていました。役者としての基礎知力をつける場だったのですね。私どもは緒形さんの蔵書も調査してまして、パソコンで目録にする作業をやってきたのですが、4,000冊を超える本をお持ちでした。まだすべてが入力し終わったわけではないですが、これもやっぱり北條先生の影響なのかなと思っています。

新国劇という劇団は、「男の劇団」と呼ばれたほどですから、修業は本当に厳しかったらしいです。はじめは辰巳さんの付き人としてスタートしますが、島田さんにもかなりかわいがられたそうです。静の島田と動の辰巳とか呼ばれたりするのですが、その両極端な芸風を学びながら修行を重ねていきます。だからこそ、芸の道における2人の師匠なのですね。

3つの転機 新国劇時代の緒形さんには大きな転機が3つあります。1つ目は島田さんによって、1960（昭和35）年に「遠い一つの道」というボクサーの舞台で主役に抜擢されたことです。辰巳さんの付き人なのですが、結構、取り立てているのは島田さんなんですね。緒形さんの芸歴を考えていく上で、これはなかなかおもしろい事実ではないかと思います。辰巳さんもそれに文句をいったりとはなさらなかったようです。「遠い一つの道」は東宝で映画化され、さらにフジテレビの新国劇アワーでも放映されました。

また、同じ年の10月に「丹那隧道」という、これは静岡と神奈川の間、丹那峠にトンネルを通すという大工事の苦悩を芝居にしたもので、北條先生の作品です。表1の受賞歴に出てきた第15回文化庁芸術祭演劇部門奨励賞というのがこの「丹那隧道」でいただいた賞です。これらが新国劇における転機になります。

そして第2の転機はいうまでもありません。NHK大河ドラマへの出演です。1965年の第3回NHK大河ドラマ「太閤記」で主演の豊臣秀吉に抜擢され、翌年の第4回大河ドラマ「源義経」では武蔵坊弁慶という重要な役を務めます。私が一番初めに緒形拳という存在を知ったのがこれら的大河ドラマでした。私の父がとにかく時代劇が好きで、その影響で観ていましたね。弁慶立ち往生の場面は、今回の展覧会でも写真を展示していますが、私も鮮明に覚えています。

テレビの黎明期で視聴者に受けるものといえば、その一つはやはり時代劇でした。NHK大河ドラマでは、第1作目が歌舞伎役者の二代目尾上松緑が井伊直弼を演じた「花の生涯」、第2作目が長谷川一夫が大石内蔵助を演じた「赤穂浪士」と、安定感のある御大を使っています。ところが、第3回で新国劇の若手俳優であった緒形拳を起用したということ自体が、それこそ当時では考えられない大抜擢だったのです。そこからまた大河ドラマのやり方も大きく変わってきます。「太閤記」のオープニングは、新幹線のシーンで始まります。前年に開通したばかりの新幹線が画面いっぱいになって行って名古屋に着く。その先をカメラが追いかけていくと森の中に入っていく、何やら青年の後ろ姿が迫ってきたかと思ってみていると、ふいに振り向いてにこっと笑う。それが緒形さんだったという、オープニングの演出からしてすごく斬新だったそうです。さらにその翌年にも連続で大河ドラマに出演されます。この後も緒形さんの大河ドラマ出演は続いて、1982（昭和57）年には「峠の群像」の大石内蔵助役で2度目の主演を務められます。2度目の主演というのも史上初めてのことでした。

そして第3の転機、これは1965年ことで、緒形さんが「太閤記」に出た年に新国劇は新体制への移行を模索します。これについては残念ながらスペースの関係で展示できませんでした。還暦を迎える島田さん、辰巳郎

さんに代わって次世代を担う役者として、若手の大山克巳さん、高倉典江さん、そして緒形拳さんを前面に押し出していこうという試みでした。大山さんが30歳、高倉さんと緒形さんが同い年で28歳でした。この2年後、1967年が新国劇50周年にあたっていまして、そこを目指しながら、新国劇を新しく変えていこうとしていたのです。この年の5月には、新たに「新国劇友の会」を創っています。

ただし、この新体制は長くは続きません。緒形さんが辞めるということもあるんですけども、その前に緒形さんが高倉さんと結婚してしまったという事実があります。お二人の仲人が北條先生ご夫婦でした。その高倉さんの代わりに新たに入ったのが若林豪さんでした。年配の方はご存じのことかと思えますけれども、そういう流れがありました。

結局、緒形さんは1968年の10月をもって新国劇を退団されます。その理由についてはさまざまな憶測が流れました。そもそも新国劇というのは、新橋演舞場や御園座などの大劇場を舞台とした大規模な商業演劇ですから、毎月公演をやらなければなりません。この頃になると、緒形さんは毎回主役を務めるようになってきました。そうするとテレビや映画には出たくても出られないといった、いろんな問題があります。このところは緒形さんに直接私も聞いてみたのですが、明確な答えはありませんでした。ただ、新国劇の殻を破ってもっと新しいことに挑戦したかった。これは間違いのないことだと思います。北條先生にも相談したところ、先生はそれに反対しなかったそうです。というのも先生自体がどうも新国劇の限界を感じていらっしまったようなのです。

表3は北條先生自身が脚本を提供した新国劇、歌舞伎、新派、舞踊劇の4つの部門に対して、12作ずつ代表作を自ら選ばれたものです。1975（昭和50）年の選考です。これによりますと新国劇でもっとも新しい作品は1959年の「松川事件」ですが、4つの分野の中ではもっとも古い作品になります。次が新派で1969年の「女優—松井須磨子—」で、続いて舞踊劇が1972年の「女親分」となります。そしてもっとも新しいのが1974年の歌舞伎「春日局」です。十二選のラインナップをみても歌舞伎に対する脚本の新しさが目につきます。この当時、

表3 北條秀司戯曲十二選

		() 内は初演年
【歌舞伎十二選】	【新派十二選】	
1 狐と笛吹き 〈今昔〉 (1952)	1 華やかな夜景 (1937)	
2 浮舟 〈源氏〉 (1953) 吉	2 闇下 (1940)	
3 妄執 <small>もうしゅう</small> 〈源氏〉 (1955)	3 高砂 (1943)	
4 末摘花 <small>すえつむはな</small> 〈源氏〉 (1955)	4 歳月 (1946)	
5 浮寝鳥 <small>うきねどり</small> (1960) 菊	5 女将 <small>おかみ</small> (1952)	
6 紙屋治兵衛 <small>かみやじへえ</small> (1961) 東宝	6 太夫さん <small>こったい</small> (1955)	
7 寝白粉 <small>ねおしろい</small> (1968) 東宝	7 智恵子抄 (1956)	
8 建礼門院 <small>けんれいもんいん</small> (1969)	8 明石の姫 〈源氏〉 (1957)	
9 千利休 (1970)	9 佃の渡し (1957)	
10 北條政子 (1972)	10 京舞 (1960)	
11 奥の細道 (1973)	11 明治の雪—樋口—葉— (1966)	
12 春日局 <small>かすがのつぼね</small> (1974)	12 女優—松井須磨子— (1969)	
【新国劇十二選】	【舞踊劇十二選】	
1 表彰式前後 (1937)	1 芦刈 <small>あしかり</small> 〈今昔〉 (1953) 東	
2 丹那隧道 <small>ずいどう</small> (1942) 前	2 いとはん (1956) 名	
3 だんじり囃子 (1943)	3 生々流転 <small>せいせいりてん</small> (1957) 東	
4 王将 (3部作 1947)	4 おこんの初恋 (1958) 新	
5 文楽 (1948)	5 花影抄 <small>かえいしょう</small> (1958) 名	
6 霧の音 (1951)	6 夜な夜な中納言 (1958) 東宝	
7 井伊大老 (1953)	7 恋河童 <small>こいがっば</small> (1959) 宝塚	
8 司法権 (1954)	8 油屋おしか (1960)	
9 山鳩 (1955)	9 鬼の少将夜長話 (1961) 東宝	
10 顔役 (1958)	10 仇ゆめ <small>あだ</small> (1966)	
11 白鳥の死 (1958)	11 西鶴一代男 (1969) 東宝	
12 松川事件 (1959)	12 女親分 (1972) 名	
※ 〈今昔〉 = 今昔物語 〈源氏〉 = 源氏物語 吉 = 吉右衛門劇団 菊 = 菊五郎劇団 東宝 = 東宝演劇 前進 = 前進座 宝塚 = 宝塚歌劇団 新 = 新派 東 = 東をどり 名 = 名古屋をどり		
		1975(昭和50)年 北條秀司十二選銓衡委員会

北條先生は、明らかに新国劇や新派よりも歌舞伎の方に力を入れていたと思われます。歌舞伎の脚本では、明治以降の作品を新歌舞伎といひまして、戦後のものを特別に新作歌舞伎ということもあります。舟橋聖一さんと三島由紀夫さんなどが新作歌舞伎の脚本を書かれています。舞台に作品を提供する劇作家は、最終的に歌舞伎の脚本を書くことが多いようです。北條先生の場合は明ら

かに歌舞伎にシフトしていく傾向がみられます。そうした事情も緒形さんの俳優人生を考えていく上で重要だと思います。同時にそれだけ北條先生の影響が大きかったのだといえるかと思うのです。

テレビの申し子 新国劇を退団された緒形さんは、先にも述べたように、実にたくさんのテレビに出演されるようになります。今回の講演では②テレビ修業時代と名

づけましたが、1968年から79年までで79本のテレビドラマに出演されます。10年区切りということで公正を期すために、1969年～78年のデータを集計してみても60本と、やはり極めて多くなっています。緒形拳といえどもどうしても映画の、というイメージが強いのかなと思うのですけれども、もしかするとテレビドラマあるいはテレビの申し子だったといった方が適切なのではないかと思うほどです。

「太閤記」をみた時に、師匠の辰巳さんが「ああ、これがテレビの顔だ。これがこれからのテレビの顔だ」といったというエピソードが伝わっています。真偽のほどは分かりませんが、舞台というのは、近くでみている人もいれば、遠くて表情などみえない人もいるわけですよね。でも、テレビというのは、カメラワークで常にアップになるわけです。映画もアップになるのですが、わざわざお金を払わなくても、足を運ばなくても家にいて毎日みることができます。そうするとその一つ一つの表情をきちんとみせていかななくちゃいけない。

緒形さんの魅力は、すごく怖い狂気の目と、何ともいえない笑顔と2つの表情を持っていらっしゃることにあると思うのですが、それらがアップで映ること、それが家で毎日みられることの意味は大きいと思うのです。テレビというメディアの展開から行くと、緒形拳は実はテレビの時代の申し子であった。それが大きなバックボーンじゃなかったのかなと、これは仮説ですが、そんなことを今、考えています。

新国劇退団後の具体的なテレビドラマ出演作についてみていきましょう。退団直後の11月には、NHKで「開化探偵帳」（1968年）という明治維新後の文明開化期に活躍した探偵のドラマに主演されます。翌年の7月にはABC（現・朝日放送）で放映された「豆腐屋の四季」という番組に出演されています。これは緒形さんにとってもすごく思い入れのある番組だったそうです。

今回は展示しておりませんが、北海道放送が制作した「ダンプかあちゃん」というドラマがあります。1969年から71年まで3回のシリーズが放映されました。長山藍子さんと共演されているのですが、ちょうどこの時代は女性が社会進出を果たしていこうという時期で、そこで女だてらにダンプを運転する男勝りのかあちゃんと

いう役柄が設定されています。時代を追いかけ、時代をリードするのもテレビの役割となっていきます。

時代劇では、NET（現・テレビ朝日）で放映された「丹下左膳」（1970年）などがあります。今回トークショーに出演していただいた豊川悦司さんも映画で「丹下左膳」の「百万両の壺」を演じられていました。この前テレビで拝見しまして、不思議な縁を感じています。それから1978年には、4度目の大河ドラマで松本幸四郎（現・松本白鷗）さんが呂宋助左衛門を演じた「黄金の日日」で、2度目の豊臣秀吉を演じられています。春日太一さんという時代劇研究者のお話だと、どちらかという「太閤記」の緒形拳は快活な若い時の秀吉というイメージの方が強いのに対して、「黄金の日日」では、晩年のいやらしさとか怖さみたいなのが出てきているのではないかとおっしゃっていました（『戦後大衆文化史の軌跡』166頁～193頁）。

2つの転機 ただ、もう展覧会を見た人はおわかりかと思いますが、この時期を代表する作品といえば、やっぱりABC（現・朝日放送）で製作された「必殺仕掛人」ですね。「必殺仕掛人」の藤枝梅安役を演じたことがこの時期の第1の転機になります。原題は池波正太郎作「仕掛人藤枝梅安」です。「仕掛人」という言葉自体が、池波さんの造語でした。山村聰さん、林与一さんと3人が闇の殺し屋という、それまでの勧善懲悪の物語とは違った、斬新な時代劇でした。テレビで人気に火がついたことで翌年と翌々年にはこの3人で映画にもなりました。また、緒形さんは1975年の9月に明治座で舞台も務められています。「遠い一つの道」以来のテレビ・映画・舞台の三位一体の作品でした。ついでにいきますと、池波さんは長谷川伸門下でしたから、北條先生とは兄弟弟子になります。

この時代のもう一つの転機が、これも改めていうまでもありませんが松竹の「鬼畜」（1978年）に出演されたことです。妾の子に対する子殺し、あるいは子捨てといった重いテーマを扱った作品でした。さらに翌年には、同じ松竹作品で、稀代の知能犯であり、連続殺人犯である榎津巖という役を好演した「復讐するは我にあり」が公開されます。緒形拳といえどもこの2つを思い浮かべられる方が多いのではないかと思います。私などもそうです。

「鬼畜」の方は原作が松本清張さん、監督が野村芳太郎さんで、岩下志麻さん、小川真由美さんらと共演されています。「復讐するは我にあり」は、原作が佐木隆三さん、監督が今村昌平監督さん、共演が三國連太郎さん、小川真由美さん、倍賞美津子さんらです。こうして代表作だけをみましても共演陣がまたすごいのです。特に女優さん。緒形さんの共演者だけでも女優史が書けるんじゃないかとひそかに思っています。

先ほどいいましたように緒形さんは、「鬼畜」で第2回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞され、「復讐するは我にあり」は第3回日本アカデミー賞最優秀作品賞に選出されています。緒形さん個人は優秀主演男優賞です。

こうした作品の影響でしょうか、緒形拳といえば「怖い」「目が怖い」といったイメージがついて回ると思います。私もそうでした。これについてKAAT 神奈川芸術劇場の眞野純館長にインタビューしたことがありまして、眞野さんがこんなことをおっしゃっていました。詳しくは『戦後大衆文化史の軌跡』（164頁）を参照してください。

だから、緒形さんをつくったのは多分、あの年齢特有の戦争体験だと思うんです。子どもの戦争体験と、壮年の戦争体験と、年寄りの戦争体験とでは、みんな全然違う。子どもの戦争体験からでなければ、ああいう目をした役者は生まれないと、私は信じます。深い。どんなに嬉しそう顔をしていても、目ん玉の奥が暗い。私たちにそういう目をしろと言われても、できるものではありません。

これについては、表4の略年表をみていただいてもおわかりいただけるかと思います。小学校の頃に、子どもの頃に戦争を経験して、なおかつそのために生まれた東京を追われ、疎開や転校をくり返したという経験がやはり大きいのではないかと思うのです。眞野さんの言を借りれば、そうした経験が緒形拳の目を作り上げたんじゃないかというのです。それが時代にマッチして、大きく飛躍したのが1970年代の後半から1980年代の、映画出演全盛期の緒形拳につながっていくのではないかと思います。

映画出演全盛期 くり返しになりますが、1980年代

は緒形さんの映画出演全盛時代です。映画が25本で、このうち主演が13本。その他テレビドラマにも44本出演されていて、このうち主役が28本です。テレビの出演回数は②期には及びませんが、特に10年単位で考えると明らかに主演の数は増えています。それにしてもこの10年間で映画の主演が13本で、出演作が25本ですから、改めて、どれだけ映画を撮っているんだと感じざるを得ないかと思えます。

こうした中、1983年には松竹の「楯山節考」と「魚影の群れ」東映の「陽暉楼」の3つの作品で第7回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞されています。2回目の最優秀主演男優賞です。

「楯山節考」は、深沢七郎さん原作、今村昌平さんの監督作品で、坂本スミ子さん、小沢昭一さん、倍賞美津子さん、あき竹城さんらと共演されています。「陽暉楼」は、原作が宮尾登美子さん、監督が五社英雄さんで、共演が池上季実子さん、浅野温子さん、倍賞美津子さんです。そして「魚影の群れ」では、吉村昭さんの原作を相米慎二さんが監督され、夏目雅子さんや十朱幸代さん、佐藤浩市さんらと共演されています。

さらに「楯山節考」は、第36回カンヌ国際映画祭でパルム・ドールを受賞されています。こちらは川崎市から現物をお借りして展示しております。また、1980年代にはもう一つ、1986（昭和61）年に東映の「火宅の人」で第10回アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞されています。檀一雄さんの同名の自伝的小説を、深作欣二さんが監督し、いしだあゆみさん、原田美枝子さん、松坂慶子さんらと共演されています。それにしましても、有り体にいいまして、原作者もすごければ監督もすごい。共演者もすごい。映画が多様化する中でこの時代を代表する監督とはほぼ一緒に仕事をし、この時代を代表する女優陣と網羅的に共演しているのです。

緒形さんの資料の中に『週刊現代』のアンケートに答えたファックスが残っています。たぶん、2000年代のものだと思います。質問は3問ありました。1問目は、「あなたにとって人生最高の映画を1作挙げてください」というもので、緒形さんは「『楯山節考』、『魚影の群れ』の2つでイッポンだ。」と応えていらっしゃいます。2番目の問いは、「その作品を選んだ理由をお聞かせくだ

さい。」というものだったのですが、これに対しては、「山の男と海の男というはっきりした色分け。どちらも生きるための必死の闘いの構図まる見え。直球（ストレート）」という回答でした。そして第3問が「その他、作品にまつわる思い入れなどがあればお聞かせください。」というもので、これに対しては「まちががなく今村監督にとっても相米監督にとっても傑作の一本だと思う。大仰ではなく命懸けだった。演じてる余裕なんてまるでなし。いわゆる、海に生きる者は海に従い、山に生きる者は山にひれ伏せ。」と回答されています。緒形さんにとって、生涯最も印象に残る映画がこの2本だったと述懐されていることにすべてが象徴されていると思います。そういった意味でも1980年代というのは特別な意味があったということができると思います。

1980年代には、これ以外に本当にたくさん印象に残る映画がありました。1982年公開の「野獣刑事」（東映）もそうですし、1985年公開の「權」（東映）などもそうです。ちなみにこの1985年にはNHKテレビドラマスペシャルで「破獄」が放送されていますし、溯りますが、1982年にはNHK大河ドラマ「峠の群像」で2回目の主演を務められています。さらにこの年には日本テレビの火曜サスペンス劇場「名無しの探偵」シリーズが始まっています。85年にはABC（現・朝日放送）で「迷宮課刑事おみやさん」、87年には同じ枠で「六本木ダンディーおみやさん」が放映されています。いずれも石ノ森章太郎さんの漫画が原作です。

そして1985年には、これは日本未公開ですけれども「Mishima: A Life In Four Chapters」が製作されました。作家三島由紀夫が東京市ヶ谷の自衛隊駐屯地で割腹自殺した事件を扱った映画です。『金閣寺』『鏡子の家』『奔馬』という3本の三島作品を3つのキャプチャー（幕）として映像化し、そこから第4部として三島の割腹自殺へと展開していきます。今年三島由紀夫没後50年にあたりますね。

この映画の何がすごいのかといいますと、製作総指揮がフランシス・コッポラとジョージ・ルーカスで、ポール・シュナイダーが監督を務めているという夢のような作品だということです。緒形さんは台本にコッポラとルーカスのサインをもらっています。残念ながらいろいろ問題

があって日本では未公開でした。また、アメリカでは興行的には失敗だったようです。そんなさまざまな関係から今回の展覧会では展示ができませんでした。ただし、1985年度の第38回カンヌ国際映画祭において最優秀芸術貢献賞を受賞したことで、各方面で大きな反響を呼んだといわれています。

これら以外で私がちょっとおもしろいなと思ったのは、1989年に東映で公開された「將軍家光の乱心 激突」です。これは家綱を亡き者にしようとした家光がたくらんで暗殺者を派遣する。その大將が千葉真一さんで、それを守る立場が緒形拳さんだという、話の内容は荒唐無稽な映画なのですが、それはこの際どうでもいいのです。何がおもしろいかというとチャンバラのシーンです。今はワイヤーアクションとかVFXとかを使った派手なチャンバラシーンが当たり前になりました。そうした技術がまだない時代に、まさしく生身の身体で屋根の上で決闘したり、壁を突き破ったりとか、それこそアクションシーン全開です。この作品は、降旗康男さんが監督をされているのですが、降旗監督がとにかくそれまでの概念を壊すような、新しい剣劇というか、チャンバラというのをつくりたかったんだろうと思わせる作品なのです。緒形さんはちょうど50歳頃だと思います。たぶん緒形さんがこれだけ剣を振った映画に出演されたのは恐らく最後で、冒険活劇としてみたらおもしろいかなと思っています。

新国劇の解散 ここは非常に難しいのですが、緒形拳といえ、やっぱり1980年代が、年齢でいえば40歳代が一つの絶頂期であったことは間違いのないといえるでしょう。ところが、80年代は日本映画の衰退期といわれています。逆にいえば日本映画の衰退期に緒形拳がひとりて気を吐いていたともいえるのではないかと思います。もし緒形さんがいなかったら、日本映画の印象もまた違ったものになっていたかも知れません。とはいえ、やっぱり映画衰退期の中の緒形拳というところからいきますと、どうしても評価が難しかったのかなと思わざるを得ません。ただ、少なくとも緒形さん主演の傑作は、1970年代の後半から80年代にかけて生まれたのだということの確認しておきたいと思います。

もう一つ1980年代の問題として確認しておきたいの

が、先ほど言いましたように新国劇が1987年の創立70周年記念公演を最後に事実上解散してしまったという事実です。新国劇を退団した後、島田さんも辰巳さんもものすごく怒っていたそうです。二度とおまえなんか顔も見たくないと。島田さんなどは会った時に、「ガタ（これは緒形さんの愛称です）、俺はおまえを許さへんからな」といわれたとおっしゃっていました。あの低い声で言われたらさぞかし怖いでしょうね。ところがその一方で、1975年になると北條秀司劇作40周年記念公演として、緒形さんが「王将」の舞台に立つこととなります。「王将」の坂田三吉は辰巳さんの当り役ですから、何らかの合意があったことは想像に難くありません。それから76年、77年と続けて「王将」の舞台に立たれるのですが、どうもその頃からも新国劇との雪解けが始まったようで、79年・80年には客分として新国劇の舞台に立つようになってきます。もちろん、御園座と新橋演舞場で開催された創立70周年の最終公演にも参加されていて、「王将」の坂田三吉を演じていらっしゃいます。この公演では、島田さんが「一本刀土俵入」、辰巳さんが「国定忠治」というそれぞれの得意演目を演じていらっしゃいます。緒形さんが「王将」の坂田三吉を演じるのはこれが最後でした。いずれにしてもこの頃の緒形さんの三吉は、どうも力が入っていけないと、緒形さん自身が述懐されています。実は美智留さんも「目だけがギラギラしていてあの頃の緒形はまだまだダメだった。ただ、最近力は抜けてきたから、もうそろそろやってもいいかもね」とおっしゃっていました。「王将」の坂田三吉はそれほど難しい役で、それが緒形さんの一つも目標であったのは確かでしょう。

それにしても、本来、新国劇という劇団は御園座や新橋演舞場、大阪歌舞伎などの大劇場でひと月公演をうつのが普通でしたから、最後は3日間だけの公演というのが淋しいですね。だからこそ、新国劇の解散というのは大衆演劇どころか、大衆文化史にとってすごく大きな事件だと思っています。そういう意味でももっと研究が進んでもいいのではないかとと思っています。

円熟期・転換期 1990年代は、テレビドラマが43本で主演が27本、前の10年と比べるとたいして変わってはいません。でも、これが実は大きいと思うのですが、

減っているのは映画への出演で、さらに舞台への出演は4本だけです。逆に増えているのがドキュメンタリーです。この時期を円熟・転換期としていますけれど、50歳を超えて緒形さんもさまざまな意味で転換期を迎えていたのだと思います。役者にはどうしても旬な時期があって、相対的に落ちてくる時期があります。その時にどのように対応したのかということが、その後の俳優人生を左右するような大きな意味があると思います。

この時期の代表的な映画作品としては、やはり1992（平成4）年の「おろしや国酔夢譚」（大映制作、東宝配給）ということになるのではないのでしょうか。原作が井上靖さんで、佐藤純彌さんがメガホンを取り、日本では西田敏行さんや江守徹さんら、ロシア側でもオレグ・ヤンコフスキーさんらと共演し、現地ロケを敢行した壮大な作品でした。本日の講演では、展示されている資料以外の秘蔵写真を使ってお話ししたいと思います。これらの写真には、竹下登さんや中曾根康弘さんなどの歴代の首相経験者をはじめ、ロシア側からもかなりの要人が写っています。それもそのはずで、この前年、1991年の12月26日にソビエト連邦が崩壊して、新生ロシアが誕生したわけですから、時代の転換点として注目された映画だったといえるかも知れません。ただし、大作の割には映画の評判はあまり高くなかったようです。

それからこの時期にはもう一つ、演劇部門として、北條秀司作の「信濃の一茶」の主演をあげたいと思います。この作品は、北條先生の卒寿記念として緒形さんのために書き下ろされたものでした。俳人の小林一茶が江戸から信濃の柏原に戻ってから亡くなるまでを描いたものです。この作品は緒形さんにとって重要な意味を持つ作品でした。それはなぜかと申しますと、劇作家は役者にあてて脚本を書くといわれています。例えば、「王将」という作品は、辰巳柳太郎にあてて書かれた作品です。そして「信濃の一茶」は、緒形拳にあてて書かれた作品なのです。緒形さんにとってみれば、北條秀司という偉大な劇作家が初めて自分のために戯曲を書いてくれた、その事実が大きいのです。

でも実のことをいいますと、北條先生はすでに1990年のはじめ頃にはこの作品を構想されていて、初めは島田正吾さんにあてて書こうとしたらしいのです。た

だし、最終的には緒形さんあてに書かれたのでした。これは2005年にも新橋演舞場で再演されていて、私はこちらのほうを観に行きました。

その他で印象に残る作品といえば、少し異質ですが「ポケベルが鳴らなくて」（日本テレビ、1993年）という作品をあげたいと思います。これは秋元康さんが企画原案されたもので、緒形さんが娘役の坂井真紀さんの友人役の裕木奈江さんと不倫関係に陥るといふ、これまた当時としては斬新な作品でした。そこで当時の雑誌などをみてみますと「脱トレンドィ・ドラマ」と書かれてたりしています。80年代の終わりから90年代の初めにかけてトレンドィ・ドラマという大きな流れがあったのですけれど、そうした流れに緒形さんも関係していたという、そうした意味でもちょっと興味深いなと思っています。

舞台への回帰 2000年代の緒形さんといえば、明らかに舞台への出演数が増えてきます。舞台が13本で、うち主演が12本。映画は14本で主演が3本。テレビドラマが22本で、主演が6本、そしてドキュメンタリーが15本で一番多くなっています。それにしても、70歳を超えても主役を張れるのですから、やはり並大抵ではありません。

ここではやはり舞台に注目したいですね。それもこの頃の舞台は、新橋演舞場で「信濃の一茶」が再演されたほかは、全国の比較的小さな劇場を廻るというスタイルでの舞台です。まずは「ゴドーを待ちながら」という作品です。これはゴドーという人物をこの二人の男、この場合緒形さんと串田和美さんなのですが、この二人がずっと待ち続けているという、いわゆる不条理劇です。結局、ゴドーは現れません。この「ゴドーを待ちながら」では、お客さんが間近にみられるような2つの辺だけが長い八角形の舞台が設営されています。2000年から04年にかけてこの舞台を各地域の会場の広さにあわせて調整しながら、全国を廻って公演を続けるのです。この会場には網走刑務所での慰問も含まれています。

それから、トム・プロジェクトという会社が企画した「子供騙し」という演目があります。篠井英介さんと、あと女優の方はその時々で変わるのですが、下北沢の本多劇場や新宿の紀伊國屋ホールなどの小さな劇場で演じられ

ました。私も2005年に紀伊國屋ホールで拝見させていただきました。篠井さんが刑事役で、殺人犯を追って緒形さんの床屋にやってくる。ところがこの篠井さんの刑事がくせ者で、夜8時の鐘が鳴った瞬間、おかまに変身するという爆笑劇でした。

それから2007年の「国定忠治」です。これは新国劇の流れをくむ劇団若獅子（現・若獅子の会）が主催した舞台上で、笠原章さんが主催されています。笠原さんは、緒形さんと入れ替わりで、新国劇に在籍した方で、ここで緒形さんは忠治の敵役の山形屋を演じていらっしゃいます。この役は1979年に新国劇の舞台に客演として出演された際、辰巳さんの「国定忠治」の相手役として演じられて以降、緒形さんの当り役となっています。それを若獅子創立20周年記念の舞台上で演じて、最後は国立劇場でも上演されますが、これもやはり全国を廻っての上演でした。緒形さんにしてみれば、山形屋を演じるのも1987年の新国劇解散公演以来20年ぶりでした。

ひとり芝居「白野」への挑戦 そしてラストに、ラストというと哀しいですが、2006年から07年にかけての「ひとり芝居 白野」があります。こちらも全国巡回公演です。「白野」はフランスの劇作家エドモン・ロスタン原作の「シラノ・ド・ベルジュラック」を額田六福と澤田正二郎が翻訳した新国劇伝統の演目で、初演は1926（大正15）年でした。これをひとり芝居として構成したのが島田正吾さんで、緒形版「白野」は鈴木勝秀さんが演出を担当しました。「シラノ・ド・ベルジュラック」は、西洋の騎士、ナイトの物語なのですが、それを日本の幕末に置き換えて、会津藩の物語に仕立てています。この主人公の白野は、大きな鼻にコンプレックスを感じています。白野の幼なじみに千種という女性がいて、千種にもものすごく恋焦がれているんだけど、自分の醜い鼻、そういう姿態をずっとコンプレックスに感じていましたから、思いを告げることができません。そこに来栖という同じ会津藩の美男子が現れます。来栖も千種に恋をすることなのですが、なかなか打ち明けることができない。その来栖の代わりに白野がずっと恋文を書いてあげます。本当は自分が好きなのに、自分が醜いからということで白野はずっと来栖の代わりに手紙を書き続けます。自分の千種に対する思いを来栖に託して書き続ける

のです。そして戦死した来栖の代わりに、最後の恋文を千種に読んであげるのですが、日が暮れて暗くなっても白野はずっと読み続けます。そこで千種は初めて、実は恋文をずっと書いていたのは白野だったということに気づくというお話です。

緒形さんはここで醜い大きな鼻をつけません。後から聞いた話ですが、緒形さんは白野の鼻を意識させたいときには、舞台上で使った杖の先が丸くなった部分を鼻も前にもってきて、イメージしてもらおうようにしていたそうです。それから最後の白野の台詞ですが、こうした男の心持ちを現わす言葉として、従来は「わしのカブトのタツガシラ」と叫びます。タツガシラというのは兜の前立てに龍をあしらったものです。これが獅子だったら「シシガシラ」になります。緒形さんはその伝統的な台詞を「男の心意気」に書き替えています。緒形さんもこれについてはかなり悩んでいたと聞きました。これは『戦後文化史の軌跡』（55頁）にも収録しているのですが、緒形さんは「何故白野か？わからないからやるのだと思います。やってみなければ判らない。判ってたらやらないと思います。やってみて判るかどうかもわからない。自分の仕事のえらび方そのものです。」と書かれています。さらに「新国劇の澤田先生、島田先生が何百回も演じられた名作を、ぼくはあのでっかい鼻をつけず『カブトのタツガシラ』という決めゼリフを変えて、それはどこかで反逆かなと思いつつ、あゝこういうところが先生は気に入らないんだ。澤田先生がやられた通りその通り島田先生はおやりになった。それを変えて演じる。やっぱりぼくの『白野』は所詮聖域から程遠い俗に塗れた『白野』です。先生ごめんなさい。」とも書かれています。

緒形さんはやはり最後まで新国劇を、島田、辰巳という二人の師匠を敬愛されていて、新国劇を継承していきたいと思っていたらっしゃったのですが、それをそのまま受け継ぐのではないのだと。自分なりに自分にあうようにアレンジしたものであって、それも自分の長年の役者としての経験の中から、新しい「白野」をつくらうとしたのだと思います。

これは何度もいっていることなのですが、この頃緒形さんは、舞台上に立つということ、その価値を再発見されたんだと思います。新国劇から始まって、テレビに出

て、映画に出てさまざまな経験を重ねて、晩年になってもう一回、新国劇の舞台を演じるということ、今の時代に何が大事かといったら、やはりみんなの前で演じるということ、そのライブ感が自分の原点だということを感じられたのだというふうに思っています。

ですからこの展覧会のテーマが、このように演じる人、これはスポーツでも歌手でもみんなそうですけれども、エンターテインメントに生きる人たち、そういう人たちにエールを送るということにつながっているのです。新型コロナウイルスでもっとも影響を受けている人たちの一つであるエンターテインメント業界、そしてその再開を待ち望んでいる観客の皆さんに対するエールです。

Ⅲ. 演劇アーカイブの可能性

最後に、時間も押し迫ってきましたが、俳優アーカイブスの可能性ということについて少しお話をしたいと思います。このような展覧会を開催できましたのも、これも何度もいいますが、緒形さんがたくさん資料を、台本やパンフレット、ポスター、それからさまざまな写真などの資料を残してくださったおかげです。「現物」が残っていなかったら、展覧会は開催できませんし、研究もできません。そしてこれが非常に重要なことなのですが、実は緒形さんの資料の整理はまだ終わっていません。これまで大学院生や学生たちと一緒に整理作業をやってきましたし、クラウドファンディングを通じても資料整理のお手伝いをいただいています。今はその成果の一部をこのような形で公開したいのですが、まだまだ途中経過なのです。

こちらは資料整理の様子です。台本とパンフレット、写真、そしてスクラップブックについて整理したものです。台本は、ダブルフラップフォルダーに入れて、黒いファイルにまとめています。パンフレットも同様にダブルフラップフォルダーに入れて、ファイルで整理しています。写真は、舞台、テレビドラマ、ドキュメンタリー、CMなどに分けて整理します。写真は大きさがまちまちなので苦労しています。そして台本もパンフレットも写真も基本的には、年代ごと、作品ごとに整理するようにしています。

そして何よりも重要なのがスクラップブックです。緒

形さんは「太閤記」の前ぐらいからスクラップブックに自分の出演作品の記事を集めるという作業をされています。ただし、スクラップブックの作成自体は業者に依頼されています。すなわち、このスクラップブックは、全国の新聞各紙はもとより、当時の芸能雑誌である『明星』や『平凡』そして『週刊TVガイド』など、さまざまな媒体からピックアップされていますので、その資料的価値はかなり高いのです。それがお亡くなりになる2008年まで195冊残っています。中にはバラバラになってしまったものもありましたが、これも大学院生や学生たちが整理してくれました。たぶんこれを全部分析してみない限り、緒形拳に関する研究は、「緒形拳論」は語れないと思っています。いや、緒形さんに関する研究だけではなく、それぞれの時代の芸能界の動向や世相などを知るための貴重な資料群になることと思います。できれば次はこれをデータベース化したいと思っています。それがホームページなどで公開できればなおいいですね。

そうすると何が分かるか。実は北條秀司先生の資料も東海大学にあって、現在、私の研究室の近くに保管してあります。それをこれまで劇作家あるいは脚本家アーカイブスという形で整理してきました。そして北條先生の教え子に当たる緒形さんの資料は、俳優アーカイブスとして整理しています。緒形さんが自分の出演作品をスクラップブックにまとめようとされたのも、北條先生の影響によるものだと思います。北條先生は、脚本を書くにあたってさまざまな資料をスクラップブックにまとめていらっしやいます。さらに上演された芝居に対しては、同じ演目であったとしても1回ごとにスクラップブックにまとめるという徹底ぶりです。その数もゆうに700冊を超えています。つまり700回以上の公演の記録が残っているということで、現在、そのほとんどは松竹大谷図書館に保存されています。

この二つの資料群をあわせることによってどんなものができるのか。どんなことがわかるのでしょうか。戦前から戦中、戦後の芸能史はもちろんのこと、大衆文化の歴史を通観しながら、その背景となる世相や社会、時代というものがより鮮明な形としてみえてくると考えています。その意味で私たちの試みは、まだまだ始まったばかりなのです。

最後になりますが、『戦後文化史の軌跡』（45頁）に収録された緒形さんの文章を紹介したいと思います。

どれにも自分に、自分が一番点数が辛くて、満足できるものは、まだない。自分に喝采をおくるには程遠い。わが国では、この道ひと筋ふうの求道者めいた生き方を尊ぶ風潮がある。その中で軽蔑されかねない。中途半端な芸であれば尚更だ。脇目もふらずに一芸を修めるのがホンモノなのだろうか、なら二流でも三流でもいい。小器用にならず、とりあえずいっしょうけんめいである。遊びながらまじめなのである。そんなふうやってきて、いつも何かに挑みながら、楽しんだり苦しんだり、鼻唄をうたい乍ら悶々としているのだ。

これは緒形さんの本音でしょう。とにかく、タブーを恐れずにいろんなことに挑戦し、いろんな趣味を持つ。でなければ新国劇を辞めたりしませんでしょうし、最後の映画作品がまさか「ゲゲゲの鬼太郎」のぬらりひよんになるとは誰も思いませんから。そこら辺については、なぜぬらりひよんを選んだのかということについては、本当に伺いたかったところですが、それが緒形拳であるといえば、そういう人なんだろうと思います。

50年の俳優人生を振り返ってみても、やはりいろんなことに挑戦されてきていることが確認できるかと思えます。新国劇の舞台が原点ではありますが、1970年代にはテレビの発達とともにテレビドラマに挑戦し、それを足がかりに本格的に映画に進出しながら、その一方で「王将」などの芝居にも挑戦する。それが役者の原型となって、1980年代に映画で全盛期を迎える。晩年になっても挑戦者としての意欲には変わりはないものの、時代に応じて変えるべきものは変えていく。そうして自分のオリジナリティを模索しながら、最終的に舞台に立つ意義を再発見していった、と今の段階ではそのようにまとめておきたいと思えます。

いずれにしても、私どもは歴史研究者として、資料を整理し、それを分析することでさらに研究を深めていくことが使命だと思っています。その意味で、残された出演作品も映像資料として貴重な資料であるということを最後に強調しつつ、拙い話を終えたいと思えます。最後までご清聴ありがとうございました。

表 4 緒形拳略年表および主要出演作品年表

年号	西暦	緒形拳	歳	区	舞台	テレビ	映画	芸能	時代背景
昭和12年	1937	7月20日:東京府東京市牛込区(現・東京都新宿区)にて誕生	0						7月:北支事変→日中戦争
昭和20年	1945	長野県南佐久郡臼田町(現・長野県佐久市)へ疎開 千葉県千葉市登戸町(現・千葉市中央区登戸)へ疎開 千葉市立都賀国民学校(現・千葉市立都賀小学校)転入学	8						7月26日:ポツダム宣言 8月15日:終戦 9月2日:降伏文書調印
昭和21年	1946		9				「民衆の敵」(今井正)		11月3日:日本国憲法公布
昭和22年	1947		10					6月4日:有楽座で「王将」(第1部)初演	5月3日:日本国憲法施行 第1次ベビーブーム=団塊の世代(~1949年)
昭和23年	1948		11				「破戒」(木下恵介)		
昭和24年	1949		12				「青い山脈」(今井正)		単一為替レート実施、1ドル=360円
昭和25年	1950	千葉市立椿森中学校入学 次兄信司、俳優座養成所二期生	13				「羅生門」(黒澤明) 「また逢う日まで」(今井正)	1月:大阪歌舞伎で「続王将」(第2部)初演 12月:京都南座で「王将 終篇」(第3部)初演 *戦後映画全盛期(~1959年頃)…黒澤明・木下恵介・今井正・市川崑	6月25日:朝鮮戦争勃発 8月10日:警察予備隊法公布
昭和26年	1951		14						対日平和条約・日米安全保障条約調印
昭和27年	1952	次兄信司 死去	15				「生きる」(黒澤明)		4月28日:対日講和条約発効
昭和28年	1953	4月:千葉県立千葉第三高等学校(現・千葉県立千葉東高等学校)入学 京王高等学校(現・専修大学附属高等学校)転入学	16				「七人の侍」(黒澤明) 「ひめゆりの塔」(今井正)	1月:シャープが国産第1号のテレビTV3-14Tを発売 2月1日:日本放送協会(NHK JOAK-TV)のテレビ放送開始 7月31日:NHK東京本放送開始 8月28日:日本テレビ、(略称NTV JOAX-TV)テレビ放送開始(民放での初のテレビ放送の開始) 9月10日:五社協定(松竹・東宝・大映・新東宝・東映)	7月27日:朝鮮戦争休戦
昭和29年	1954	東京都文京区小石川に転居、同時に東京都立竹早高等学校へ転入学	17				「二十四の瞳」(木下恵介)		9月23日:自衛隊法公布
昭和30年	1955		18				「野菊の如き君なりき」(木下恵介)	4月1日:ラジオ東京(KRT・KRテレビ JOKR-TV、現:TBSテレビ)がテレビ放送開始	※第1次高度経済成長(~61年) 11月15日:自由民主党結成→55年体制(自民党政権)
昭和31年	1956		19				「ビルマの豎琴」(第1部・第2部)(市川崑)	12月:NHKがカラーテレビ実験放送開始	7月17日:経済白書…「もはや戦後ではない」 12月18日:国連総会で日本の国連加盟を可決
昭和32年	1957	3月:東京都立竹早高等学校卒業	20				「蜘蛛の巣城」「どん底」(黒澤明) 「喜びも悲しみも幾歳月」(木下恵介)	11月1日:日本教育テレビ(NET現:テレビ朝日)設立 11月18日:富士テレビジョン(開局前の1958年12月にフジテレビジョンに改称)設立 12月28日:NHK東京、日本テレビがカラー試験放送開始	2月:岸信介首相就任一新長期経済計画
昭和33年	1958	3月:新国劇入団 4月~5月:大船の北條秀司邸に寓居	21	新国劇時代	3月:無法松の一生(初舞台)		「隠し砦の三悪人」(黒澤明) 「楢山節考」(木下恵介)	9月:六社協定に移行(日活が加入) 12月23日:東京タワーから放送開始	3月9日:関門トンネル開通

年号	西暦	緒形拳	歳	区	舞台	テレビ	映画	芸能	時代背景
昭和34年	1959		22		5月：新選組異聞			1月10日：NHK教育テレビジョン開局 2月1日：日本教育テレビ（NET JOEX-TV現：テレビ朝日）開局 3月1日：フジテレビ（略称：CX JOCX-TV）開局 ※テレビの本格的普及	4月10日：明仁皇太子成婚 ※安保闘争（～60年）
昭和35年	1960	6月：芸名を「緒形拳」とする 第15回文化庁芸術祭演劇部門奨励賞（丹那隆道）	23		6月：遠い一つの道 10月：丹那隆道		9月：遠い一つの道（宝） 「おとうと」（市川崑）	9月10日：カラーテレビ本放送開始 *戦後映画の模索期（～1969年頃）	1月19日：新日米安保条約・行政協定調停 6月23日：新日米安保条約批准交換 7月19日：第一次池田勇人内閣発足 12月27日：所得倍増計画発表 *ベトナム戦争開戦
昭和36年	1961		24		2月：王将一代 9月：戦国悪党伝 12月：六人の暗殺者	1月：新国劇アワー 遠い一つの道（フジ） 5月：新国劇アワー 丹那隆道（フジ）	「用心棒」（黒澤明）	11月15日：ATG（映画）発足 新東宝が倒産したため、再び五社協定に（NHK連続ドラマ小説開始）	8月13日：東ドイツ政府、東西ベルリンの境界に壁を構築 ※第一次高度経済成長の行き詰まり（1955～61年）
昭和37年	1962		25		6月：新撰組 12月：殺陣師段平	2月：フライング・スボット（NHK） 3月：初恋（NET）	「椿三十郎」（黒澤明）		8月26日：三宅島大噴火 9月6日：激甚災害法公布 10月5日：全国総合開発計画を閣議決定 10月22日：キューバ危機
昭和38年	1963		26	新国劇時代	6月：真田太平記 10月：颱風族	2月：帰らぬひと（朝日放送） 12月：由井正雪（NHK）	「天国と地獄」（黒澤明）	（NHK大河ドラマ開始） 11月23日：初の日米間テレビ宇宙中継受信に成功	11月23日：ケネディ米大統領暗殺 12月21日：教科書無償措置法公布
昭和39年	1964		27		1月：新書 太閤記 3月：行友李風先生追善公演 極付 国定忠治 9月：極付 新撰組	4月：風雪 最後の将軍（NHK） 6月：網の中の栄光（フジ） 7月：その灯は消えない 放心楼異聞（東12） 8月：わか町（NET） 9月：おやじの勲章（フジ） 11月：コスモスよ赤く咲け（フジ） 12月：殺陣師段平（NHK）	9月：間諜（映）	4月12日：財団法人日本科学技術振興財団テレビ局開局（通称：東京12チャンネル、別称：科学テレビ、略称：TX JOTX-TV）、後に東京12チャンネルを経てテレビ東京 ※カラーテレビの普及	4月28日：日本、経済協力開発機構（OECD）に加盟 6月16日：新潟地震 10月1日：東海道新幹線開業 10月10日：東京オリンピック開幕 10月16日：中国、初の原爆実験に成功 11月9日：第1次佐藤栄作内閣発足
昭和40年	1965		28		1月：總持寺の仇撃 1月：慶安の狼 丸橋忠弥 3月：風船玉計画 6月：沼津兵学校 9月：坊っちゃん 10月：姿三四郎 11月：暗殺 12月：太閤記	1月：太閤記（NHK大河）	「東京オリンピック」（市川崑） 高倉健「網走番外地」	1月：新国劇友の会発足 一新国劇新体制に移行 1960年代後半：寺山修司や唐十郎、蜷川幸雄などの「小劇場第一世代」	2月7日：米軍機、北ベトナムの爆撃を開始 6月22日：日韓基本条約に調印 8月19日：佐藤栄作、戦後初の首相沖繩訪問 10月21日：朝永振一郎、ノーベル物理学賞受賞
昭和41年	1966	2月：高倉典江と結婚 11月21日：長男幹太誕生	29		3月：義経と弁慶 4月：太閤記 藤吉郎とその母 6月：若き日の旅 7月：太閤記 12月：事件記者一豪雪の中にー	1月：源義経（NHK大河）			3月31日：日本の総人口が1億人を突破 5月16日：中国、文化大革命始まる 7月29日：東京で日ソ領事条約調印 ※第2次高度経済成長（～73年）
昭和42年	1967	9月22日：次男直人誕生	30		2月：あゝ同期の桜 3月：沼津兵学校 7月：あゝ同期の桜 雲彦むし屍 10月：上意討ち 12月：あゝ同期の桜 雲彦むし屍	4月：剣（第2回）山犬ともぐら（日テレ） 8月：競演女優シリーズ（第5回）霧気眼鏡（TBS） 8月：剣（第20回）宗龍寺の反乱（日テレ） 9月：いとこ同志（日テレ） 10月：剣（第28回）縄張（日テレ）			7月29日：米国デトロイト市で史上最大の黒人暴動が発生し、全米各地に波及 8月3日：公害対策基本法公布 9月1日：四日市ぜんそく患者、初の大気汚染公害訴訟

年号	西暦	緒形拳	歳	区	舞台	テレビ	映画	芸能	時代背景
昭和43年	1968	10月:新国劇退団	31	新国劇時代	2月:三匹の侍 逆手斬り 3月:日本のいちばん長い日 7月:あゝ同期の桜 雲 渉む屍 7月:三匹の侍 逆手斬り	3月:お庭番 元禄十四年・元禄十五年(日テレ) 7月:日本剣客伝(第5話)柳生十兵衛(NET) 9月:私のダイヤモンド(TBS) 9月:お庭番 危機一髪(日テレ) 10月:一番星(日テレ) 11月:開化探偵帳(NHK)	6月:セックス・チェック 第二の性(大映) 10月:積木の箱(大映)	※カラーテレビの本格的普及	1月29日:東大紛争始まる 5月:フランス5月革命 5月16日:十勝沖地震 5月:日大紛争 6月6日:ロバート・ケネディ暗殺 6月15日:文化庁設置 8月20日:チェコ事件→プラハの春 10月17日:川端康成、ノーベル文学賞受賞 ※大学紛争
昭和44年	1969	2月27日:長女朋誕生	32			1月:風林火山(NET) 7月:颱風とざくろ(日テレ) 7月:豆腐屋の四季(朝日放送) 12月:ダンブかあちゃん(北海道放送)	2月:永訣(松竹) 3月:風林火山(東宝) 6月:七つ顔の女(松竹) 10月:わが恋わが歌(松竹)	日本のテレビ受像機生産台数が世界1位になる。	1月18日:東大安田講堂事件 5月26日:東名高速道路全面開通 7月20日:米宇宙船アポロ11号、人類初月面着陸 10月15日:全米でベトナム反戦行動開始 ※大学紛争
昭和45年	1970		33		3月:華やかな夜景 8月:花筵	1月:風待ちの港(NHK) 4月:丹下左膳(NET) 4月:ダンブかあちゃん その2(北海道放送) 8月:ダンブかあちゃん その3(北海道放送) 8月:湖笛(NET) 9月:柳生十兵衛(フジ) 10月:面影(NHK) 12月:歳月(NHK)		1970年代:つかこうへいから「小劇場第二世代」一コマテイ・パロディを取り入れたエンターテインメント化 *映画多様化の時代…大島渚・今村昌平・五社英雄 ~ 山田洋次・相米慎二	2月3日:核拡散防止条約に調印 3月14日:大阪万国博覧会開幕 3月31日:よど号ハイジャック事件 7月14日:日本の呼称を「ニッポン」に統一することを閣議決定 10月20日:防衛白書を政府が初めて発表 11月25日:三島由紀夫、東京・市ヶ谷の自衛隊内で決起を呼びかけ、剖腹自殺 ※安保闘争
昭和46年	1971		34	テレビ修業時代	8月:ボーイング・ボーイング	2月:どんとこい(日テレ) 4月:おゆきさん(フジ) 6月:ダンブかあちゃん その4(北海道放送) 9月:もう一つの傷(NHK)	5月:腕という女(ほるぶ映画)	五社協定解消 8月:日活が映画から撤退 10月10日:NHK総合テレビ、全カラー化	6月17日:日米沖縄返還協定に調印 8月16日:ニクソン・ショック=ブレトン・ウッズ体制の終結 基準外国為替相場を1ドル=308円に変更 ※第2次ベビーブーム(~1974年)
昭和47年	1972	第10回ギャラクシー賞受賞(必殺仕掛人)	35		1月:春の坂道 6月:女徳 7月:業平金庫破り 7月:浪花かんざし 恋の勝負師	1月:新・平家物語(NHK大河) 1月:24時間の男(TBS) 4月:しがらき物語(NET) 4月:平戸にて(RKB) 9月:必殺仕掛人(朝日放送) 9月:母の鈴(TBS)			2月3日:冬季オリンピック札幌大会開幕 2月19日:浅間山荘事件 2月21日:ニクソン米大統領が中国を訪問 5月15日:沖縄返還 7月7日:田中角栄内閣発足 9月29日:日中共同声明(日中国交正常化)
昭和48年	1973		36		4月:朱鷺の墓 7月:北斎漫画	1月:出雲阿国(NET) 2月:北の家族(NHK) 5月:雨ニモマケズ(北海道) 9月:愛といのち(TBS) 10月:さよなら・今日は(日テレ) 10月:刃傷(中部)	9月:必殺仕掛人・梅安鏡地獄(松竹) 菅原文太「仁義なき戦い」(深作欣二)		1月29日:ニクソン米大統領がベトナム戦争終結を宣言 2月14日~:各国が変動相場制に移行 8月8日:金大中誘拐事件発生 10月23日:第1次オイルショックー高度経済成長の終焉 11月24日:関門橋開通 ※しらかげ世代ー三無主義ーモラトリアム
昭和49年	1974		37		1月:ノーセックス・ブリーズ 10月:糸あやつり人形 芝居 おんによる盛衰記	3月:ねぎぼうずの唄(NET) 4月:八州犯科帳(フジ)	2月:必殺仕掛人・春雪仕掛針(松竹) 9月:狼よ落日を斬れ 風雲・怒濤編(松竹) 10月:砂の器(松竹)		1月7日:民放各局、深夜放送中止 8月8日:ニクソン米大統領、ウォーターゲート事件で辞任 10月8日:佐藤栄作、ノーベル平和賞受賞

年号	西暦	緒形拳	歳	区	舞台	テレビ	映画	芸能	時代背景
昭和50年	1975		38	テレビ 修業時代	6月:「王将」初演(北條秀司劇作40周年記念公演) 8月:淫乱斎英泉 9月:狐狸狸ばなし 9月:必殺仕掛人 9月:浮世絵 女ねずみ小僧	1月:必殺必中仕事屋家業(朝日放送) 2月:夜の王様(NHK) 4月:霧の感情飛行(朝日放送) 9月:野菊の墓(NHK)			3月10日:山陽新幹線開通 4月30日:サイゴン陥落、ベトナム戦争集結 11月15日:第1回先進国首脳会議(サミット)を仏ランブイエ城で開催
昭和51年	1976		39		4月:悲しき恋泥棒 9月:西郷札 12月:王将	1月:風と雲と虹と(NHK大河) 7月:必殺からくり人(朝日放送)			4月5日:45天安門事件(第1次天安門事件)発生 7月27日:ロッキード事件で田中角栄前首相逮捕
昭和52年	1977	鈍牛倶楽部創立	40		1月:日本人萬歳! 3月:からすなげ啼くの～さすらいの詩人・野口雨情 5月:北斎漫画 6月:王将	3月:新西洋事情(第3回・最終回)味噌汁派欧州へ行く(NHK) 6月:赤い激流(TBS) 6月:近眼ママ恋のかけひき(日テレ) 8月:東京上空2000M フレ操縦不能(テレビ朝) 11月:新必殺からくり人(朝日放送)	6月:八甲田山(東宝)		7月14日:国内初の静止気象衛星ひまわりを打ち上げ 9月5日:王貞治が国民栄誉賞第1号受賞
昭和53年	1978		41		10月:座頭市物語 10月:鶴八鶴次郎 10月:因果小僧六之助	1月:黄金の日日(大河) 4月:悪女について(テレビ朝) 7月:大空港(フジ) 8月:獅子のごとく(TBS) 11月:青春の証明(MBS)	10月:鬼畜(松竹) 松田優作「殺人遊戯」		5月20日:新東京国際空港(成田)開港 8月12日:日中平和友好条約調印
昭和54年	1979	4月9日:第2回日本アカデミー賞主演男優賞受賞(鬼畜) 4月:新国劇と和解 澤田正二郎五十年祭に出演	42	4月:祭りの笛(新国劇) 極付 国定忠治(〃) 関の弥太っぺ(〃) 6月:藤籠車夫 6月:新座頭市物語・糸ぐるま 7月:人生劇場から吉良常編〜(新国劇) 喧嘩富士 新場の兄弟(〃)	1月:阿修羅の如くパート1(NHK) 5月:新・座頭市(第3シリーズ・第6話)糸ぐるま(フジ) 6月:歪んだ星座 受験勉強殺人事件(テレビ朝) 7月:愛ってなんですか(第7回)お父ちゃん(フジ) 9月:深流釣り殺人事件 殺意の三面渓谷(テレビ朝) 10月:ちょっとマイウェイ(日テレ) 11月:葉蔭の露(朝日放送) 11月:赤い嵐(TBS)	4月:復讐するは我にあり(松竹) 松田優作「蘇る金狼」「処刑遊戯」	4月:退団後初めて新国劇の舞台に立つ 10月:株式会社劇団新国劇倒産	1月17日:イラン革命により第2次オイルショック 3月28日:米国スリーマイル島原子力発電所で放射能漏れ事故 5月4日:英国で先進国初の女性首相サッチャー就任 6月28日:東京で先進国首脳会議(サミット)開催 11月4日:イラン米大使館人質事件 12月27日:ソ連がアフガニスタンに侵攻	
昭和55年	1980		43	4月:石川五右衛門 5月:陰の母(新国劇) 極付 国定忠治(〃)	5月:史上最大の保険金詐欺殺人事件 逃亡の(はて(よみうり)) 7月:さよならお竜さん(MBS) 7月:土屋隆夫の消えた男(テレビ朝)	2月:影の軍団 服部十蔵(東映) 6月:復活の日(東宝) 6月:わるいやつら(松竹) 松田優作「野獣死すべし」	1980年代:野田秀樹、鴻上尚史、横内謙介ら「小劇場第三世代」	5月27日:韓国光州事件発生 9月22日:イラン・イラク戦争開戦	
昭和56年	1981		44	映画最盛期	4月:快盗鼠小僧といれずみ判官(フジ) 4月:青年 さらば愛しき日々よ!(日テレ) 6月:見まわせば二人(日テレ) 10月:さらば適塾(MBS) 10月:タクシー・サンパ(NHK) 11月:きりぎりす(関西テレビ)	2月:太陽のきずあと(東映) 3月:ええじゃないか(松竹) 6月:魔界転生(東映) 7月:北斎漫画(松竹) かとうかずこ「なんとなく、クリスタル」		3月2日:中国残留孤児が正式に初来日 3月16日:第2次臨調(土光臨調)初会合 4月12日:米国がスペースシャトル「コロンビア」打ち上げ 10月14日:福井謙一、ノーベル化学賞受賞	
昭和57年	1982		45		1月:峠の群像(NHK大河) 3月:名無しの探偵シリーズ①(日テレ) 10月:仕事人大集合(朝日) 11月:釣部深三郎の推理"釣れない魚の謎"(テレビ朝)	野獣刑事(東映)		4月2日:フォークランド紛争 11月15日:上越新幹線開業 11月27日:中曽根康弘内閣発足	

年号	西暦	絵形拳	歳	区	舞台	テレビ	映画	芸能	時代背景
昭和58年	1983	カンヌ映画祭でパルム・ドールを受賞(楢山節考)	46			2月:名無しの探偵シリーズ②(日テレ) 11月:不倫の女 かりそめの未亡人(テレ朝) 11月:虹へ、アヴァンチュール日本縦断連続殺人 代愚郷謎(朝日)	4月:楢山節考(松竹) 9月:OKINAWAN BOYS オキナワの少年(東宝) 9月:陽暉楼(東映) 10月:魚影の群れ(松竹)		3月24日:中国自動車道全通 4月15日:東京ディズニーランド開園 9月1日:ソ連空軍機による大韓航空機墜落事件
昭和59年	1984	2月16日:第7回日本アカデミー賞主演男優賞受賞(楢山節考/陽暉楼/魚影の群れ)	47		10月:わが町	1月:高級コールガールの殺人ワナに落ちた非行刑事 なぜ彼女は撃ったか?(朝日放送) 3月:盲点(日テレ) 4月:授業参観の生徒の母がコールガール!?まじめ教師がたった一度の非行(テレ朝) 5月:炎熱商人(NHK) 7月:羽田浦地図(NHK)		5月12日:NHKが世界初の一般視聴者向け衛星試験放送開始	8月12日:日本専売公社民営化 12月25日:日本電信電話公社民営化
昭和60年	1985		48		1月:建礼門院~平家物語より~	2月:原島弁護士のおと悲しみ(TBS) 4月:破獄(NHK) 6月:愛胎の森(TBS) 8月:迷宮課刑事おみやさん(朝日放送)	1月:権(東映) 10月:MISHIMA(米・日本未公開) 10月:薄化粧(松竹)		4月1日:日本たばこ産業株式会社・日本電信電話株式会社(NTT)開業 6月1日:改正男女雇用機会均等法公布(翌年4月施行) 8月12日:日航機が群馬県御巢鷹山に墜落、520名死亡 9月22日:ブラザ合意(自由変動相場制から管理相場制へ) 11月19日:レーガン〜ゴルバチョフ、米ソ首脳会談(ジュネーブ)
昭和61年	1986		49	映画最盛期		1月:大黄河(ナレーション・NHK) 5月:神々の峰・アンデス大自然行(テレ朝)	4月:火宅の人(東映)	12月25日:NHKBS-2(衛星第2放送)開始	4月1日:男女機会均等法施行 4月26日:チヨルノブイリ原子力発電所で大事故 ※この頃からバブル景気/新人類
昭和62年	1987	2月19日:第10回日本アカデミー賞主演男優賞受賞(火宅の人)	50		8月:(新国劇)王将 極付 国定忠治 一本刀土俵入	2月:名無しの探偵シリーズ③(日テレ) 6月:炎の料理人・北大路魯山人(日テレ) 10月:六本木ダンディーおみやさん(朝日放送)	6月:吉原炎上(東映) 9月:女街 WEGWN(東映)	新国劇創立70周年で解散	4月1日:国鉄・分割民営化 ※ソビエト連邦〜ベレストロイカ開始(ゴルバチョフ)
昭和63年	1988		51			1月:徳川家康(TBS) 1月:恋人関係(TBS) 1月:とっておきの青春(NHK) 4月:名無しの探偵シリーズ④(日テレ) 7月:虹のある部屋(NHK) 11月:海の群星(NHK)	3月:ラブストーリーを君に(東映) 7月:優駿 ORCION(東宝) 10月:華の乱(東映) 12月:孔雀王(東宝)		3月13日:青函トンネル開通 3月17日:東京ドーム落成 6月18日:リクルート事件が発覚 6月19日:牛肉・オレンジ輸入問題(日米貿易摩擦)決着 10月8日:ユーゴスラビア・コソボ自治州の民族紛争拡大
平成1年	1989		52			1月:織田信長(TBS) 2月:名無しの探偵シリーズ⑤(日テレ) 10月:SERIES DEAMA10 詩城の旅びと(NHK) 10月:野望の国 嵐の章(日テレ) 11月:外科東病棟(TBS) 11月:風の谷・虹の村スペイン・バスクの365日(テレ朝) 12月:旅の終りに(日テレ)	1月:将軍家光の乱心激突(東映) 2月:座頭市(松竹) 6月:社葬(東映)	7月29日:辰巳柳太郎死去	1月8日:平成に改元 4月1日:消費税施行 6月3日:中国、第2次天安門事件 11月9日:ドイツ・ベルリンの壁崩壊 12月2日:米ソ両首脳、東西冷戦の終結を宣言
平成2年	1990		53	円熟期・転換期		1月:新吾十番勝負(テレ朝) 2月:名無しの探偵シリーズ⑥(日テレ) 3月:失われた時の流れを(フジ) 4月:普通の結婚式(TBS) 10月:名無しの探偵シリーズ⑦(日テレ) 12月:清寂の声 乃木希典・静子の生涯(朝日放送) 12月:忠臣蔵(TBS)		5月3日:池波正太郎死去 1990年代-「小劇場演劇」の衰退→「第四世代」=三谷幸喜、中島かずき、成井豊→「第五世代」(長塚圭史、本谷有希子、村上大樹など) - 集団性の喪失	8月2日:イラク軍、クウェート侵攻 10月1日:東証株価が2万円を割る 10月3日:東西ドイツ統一

年号	西暦	緒形拳	歳	区	舞台	テレビ	映画	芸能	時代背景
平成3年	1991	初の個展開催	54	円熟期・転換期		1月:太平記(NHK大河) 5月:父の涙第2弾 ガン病棟八階(TBS) 11月:萬里の長城(TBS・CCTV)	1月:大誘拐 RAINBOW KIDS(東宝) 2月:陽炎(松竹) 4月:グッバイ・ママ(松竹) 6月:嘘みつきたい(東宝)	9月1日:日本衛星放送(現・WOWOW)が民間初の衛星放送開始	1月16日:湾岸戦争 4月24日:自衛隊初の海外派遣 6月3日:雲仙普賢岳噴火、火砕流発生 12月26日:ソビエト連邦崩壊 ※バブル景気崩壊→失われた10年(20年)
平成4年	1992		55			3月:99%の誘拐(日テレ) 4月:愛はどうだ(TBS) 8月:アマゾン紀行(前後編)(NHK) 9月:拝啓、男たちへ① そよ風ときにはつむじ風(TBS) 9月:名無しの探偵シリーズ⑧(日テレ) 10月:逆転報道(TBS) 12月:萬里の長城を行く(TBS・CCTV)	6月:おろしあ国酔夢譚(東宝) 8月:継承歪(東映)	8月3日:五社英雄死去	5月1日:国家公務員、完全週休二日制実施 7月1日:山形新幹線開業 8月27日:東京佐川急便事件で金丸信自民党副総裁辞意表明 9月12日:学校週5日制スタート〔第2土曜日休校〕
平成5年	1993		56		3月:信濃の一茶(北條秀司卒寿記念)	2月:拝啓、男たちへ⑤ そよ風ときにはつむじ風(TBS) 4月:春の一族(NHK) 5月:名無しの探偵シリーズ⑨(日テレ) 7月:ポケベルが鳴らなくて(日テレ)	5月:国会へ行こう!(東宝)		6月9日:皇太子徳仁親王〔今上天皇〕ご成婚 8月9日:細川護熙を首班とする日本新党を中心とした8党連立政権誕生→非自民党政権奪取
平成6年	1994		57		3月:大菩薩峠〜机籠之助の巻〜	1月:動く壁(フジ) 4月:スチュワーデスの恋人(TBS) 5月:名無しの探偵シリーズ⑩(日テレ) 10月:秋の一族(NHK) 12月:印度漂流 生と死の大地 神々の饗宴(テレビ朝)	5月:土佐に鬼たち(松竹)	※1990年代半ば以降から製作委員会方式の映画が一般的になる	5月6日:英仏海峡トンネル開通 6月28日:松本サリン事件 6月30日:社会党の村山富市を首班とする自民・社会・さきがけによる連立内閣誕生 9月4日:関西国際空港開港 12月10日:大江健三郎、ノーベル文学賞受賞 ※就職氷河期
平成7年	1995		58		3月:リチャード三世	8月:名無しの探偵シリーズ⑪(日テレ) 10月:百年の男(NHK) 11月:日本海大紀行(TBS) 第1夜 ロシア沿岸州 第2夜 朝鮮半島 第3夜 日本海代廻廊	9月:さよならニッポン! GOODBYE JAPAN(シネカノン)		1月17日:阪神・淡路大震災 3月20日:地下鉄サリン事件 11月23日:Windows95日本語版発売→インターネットの本格的普及
平成8年	1996		59			1月:命捧げ候〜夢追い坂の決闘(NHK) 2月:ナニワ金融道(フジ) 4月:名無しの探偵シリーズ⑫(日テレ) 7月:八月のラブソング(よみうり) 7月:橋の前(フジ) 10月:最後の家族旅行 Family Affair(TBS) 10月:ナニワ金融道2(フジ) 10月:白愁のとき(TBS)	6月:GONIN2(松竹)	5月19日:北條秀司死去	3月20日:英で狂牛病問題 12月17日:在ベルー日本大使公邸占拠事件発生
平成9年	1997		60		9月:スカイライト	1月:毛利元就(NHK大河) 6月:ギフト(最終話)謎がすべて明らか!(フジ)	7月:ピーター・グリーナウェイの枕草子(エース・ピクチャーズ)	6月21日:勝新太郎死去	3月22日:秋田新幹線開業 7月:アジア通貨危機
平成10年	1998		61			1月:翔ぶ男(NHK) 1月:ナニワ金融道3(フジ) 1月:灼熱のシルクロード ユーラシア大陸横断列車の旅(TBS) 6月:チョコレート革命(NHK-BS2) 8月:中央流沙(日テレ)			2月7日:冬季オリンピック長野大会開幕 7月25日:和歌山毒物カレー事件

年号	西暦	緒形拳	歳	区	舞台	テレビ	映画	芸能	時代背景
平成11年	1999	フランス・ペノデ映画祭グランプリ受賞(あつもの)	62	円熟期・転換期		2月:チョコレート革命(NHK-BS2) 4月:春の惑星(TBS) 4月:古畑任三郎 黒岩博士の恐怖(フジ) 4月:ナニワ金融道4(フジ) 11月:ディア・フレンド(TBS)	1月:流星★星 リュウセイ(リトルモア) 10月:あつもの 空平の秋(シネカノン)		1月1日:EU11か国が単一通貨「ユーロ」導入 5月14日:情報公開法公布 7月16日:地方分権一括法公布 一平成の大合併 8月9日:国旗・国歌法成立 8月13日:産業活力再生特別措置法(産業再生法) ※超就職氷河期 * I T バブル
平成12年	2000	紫綬褒章受章	63		2月:ゴドーを待ちながら	4月:手塚治虫劇場 第三章 カノン(テレビ朝) 9月:ナニワ金融道5(フジ) 12月:大アフリカ(TBS)	11月:KOROSHI 殺し(ミュージアム)	12月1日:BSデジタル放送開始	6月1日:大規模小売店舗立地法(新大店法)公布 7月19日:新紙幣2000円発行 9月1日:三宅島噴火による全島避難決定
平成13年	2001		64		6月:ゴドーを待ちながら 10月:信濃の一茶	11月:聖徳太子(NHK)	1月:歩く、人(モンキータウンプロダクション)	5月:デジタル音楽放送「SOUND PLANET」開始 9月1日:相米慎二死去	4月26日:小泉純一郎内閣発足(～06)→聖域なき構造改革 9月11日:アメリカ同時多発テロ * I T バブル崩壊
平成14年	2002	独立・個人事務所専用サイト「ハラハチブンマー」開設	65		2月:ゴドーを待ちながら2002 7月:ロマンティックコメディ 風狂伝'02 9月:子供騙し 12月:60歳のラブレター	8月:焼け跡のホームランボール(NHK)		3月1日:110度CSデジタル放送「フラット・ワン」開始 7月1日:110度CSデジタル放送「スカイパーフェクTV!2」開始	4月1日:小中学校の学習指導要領改訂により学校完全週休2日制導入 ※→ゆとり教育/ゆとり世代 5月31日:日韓ワールドカップ開幕 7月:首都圏・近畿圏における工場等制限法廃止 10月25日:北朝鮮拉致被害者5人が帰国 12月10日:小柴昌俊がノーベル物理学賞、田中耕一が同化学賞受賞
平成15年	2003		66	舞台への復帰	6月:ゴドーを待ちながら2003	4月:ブラックジャックによろしく(TBS) 6月:タイムリミット(TBS) 9月:血脈(テレ東) 10月:エ・アロール それがどうした(TBS)	4月:11'0901ノセプテンバー11 おとなしい日本人(東北新社)	1月17日:110度CSデジタル放送 蓄積型双方向サービス(ep)開始 12月1日:東京・名古屋・大阪を中心に地上(陸上)のデジタル方式テレビ放送の導入 12月24日:ヤフー、映像配信サービス「Yahoo!動画」提供開始	3月20日:イラク戦争開戦 4月:六本木ヒルズ開業 5月23日:個人情報保護法成立
平成16年	2004	(11月3日:東海大学トークステージ)	67		3月:ゴドーを待ちながら	3月:ひまわりさん 遺失係を命ず!(TBS) 7月:人間の証明(フジ) 10月:素敵な宇宙船地球号(テレ朝)	8月:ミラーを拭く男(バル企画) 8月:IZO(チークオクヤマ) 10月:下弦の月～ラスト・クォーター(松竹) 10月:隠し剣 鬼の爪(松竹)	11月26日:島田正吾死去	1月29日:陸上自衛隊にイラク派遣命令 3月13日:九州新幹線開業 11月2日:プロ野球に50年ぶりに新球団・東北楽天ゴールデンイーグル参入決定
平成17年	2005		68		1月:子供騙し	1月:ナニワ金融道6(フジ) 3月:青春の門-筑豊篇(TBS) 4月:瑠璃の島(日テレ) 7月:ひまわりさん 遺失係を命ず! 2(TBS) 10月:いくつかの夜(CBC)	10月:蝉しぐれ(東宝)	4月25日:USENが完全無料パソコンテレビ「GyaO(ギャオ)」を正式開始 12月15日:YouTubeが公式サービス開始	3月25日:日本国際博覧会「愛知万博」「愛・地球博」開幕 10月1日:道路関係四公団の民営化 11月17日:マンション・ホテルの耐震強度偽装発覚
平成18年	2006	モントリオール映画祭グランプリ受賞(長い散歩)	69		10月:ひとり芝居 白野～シラノ～	5月:プラネットアース(NHK・BBC) 10月:セーラー服と機関銃(TBS)	6月:佐賀のがばいばあちゃん(東映) 9月:ミラクルバナナ(ミラクルバナナ製作委員会) 12月:武士の一分(松竹) 12月:長い散歩(キネティック)	4月1日:ワンセグ開始 5月30日:今村昌平死去	1月23日:ライブドア社長らが証券取引法違反容疑で逮捕 9月26日:第1次安倍晋三内閣発足

年号	西暦	緒形拳	歳	区	舞台	テレビ	映画	芸能	時代背景
平成19年	2007		70	舞台への 復帰	3月:国定忠治(劇団若獅子) 10月:ひとり芝居 白野 ~シラノ~	1月:風林火山(NHK大河) 1月:瑠璃の島 SPECIAL 2007(フジ) 2月~:プラネットアース (NHK・BBC)		1月:アップル社がiPhoneを発売 1月:Netflix社がDVDレンタルサービスからビデオ・オン・デマンド方式によるストリーミング配信サービスに移行 10月1日:BSアナログハイビジョン放送終了	8月9日:金融システム不安で世界同時株安 9月:米サブプライム住宅ローン危機→住宅バブル崩壊 10月1日:日本郵政公社民営化
平成20年	2008	10月5日:死去 10月31日:旭日小綬章受賞	71			8月:帽子(NHK) 10月:風のガーデン(フジ)	3月:ライラの冒険 黄金の羅針盤(吹替え・松竹) 7月:ゲゲゲの鬼太郎 千年呪い歌(松竹)		9月15日:リーマン・ショック→世界金融危機・世界同時不況 11月5日:米大統領に民主党のオバマ候補が当選

※赤文字は主役を勤めた演目。基本的に初演のみに限った。緑文字はドキュメンタリー番組。「映画」の紫文字は、1980年までの代表的な作品。「芸能」「時代背景」の青文字は特に重要と思われる項目。

